

# サン・シモン主義をめぐる

ハイネ、アーレンス、モール（上）

木村周市朗

- 一 はじめに
- 二 空想的社会主義とブルジョワ自由主義
- 三 パリのハイネの人物評 （以上、本号）
- 四 アーレンスのサン・シモン主義批判
- 五 モールのサン・シモン主義批判
- 六 展望

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

## 一 はじめに

十九世紀のドイツでプラトン・キリスト教的人格主義の立場から独自の自然法論を展開したクラウゼ派の法哲学は、経験界の目的概念を排除したカントの法形式論とは対照的に、十八世紀ドイツ啓蒙を継承する人間の「使命」論（「諸善」論）の見地に立つて目的論的な法実質論を提示し、それをつうじてドイツにおける「政治的学問」としての国家学の近代的活性化に固有の寄与をなしたと思われる。その寄与の核心的部分は、カント・サヴィニエー的主流思想としての法形式論が原理的に断念せざるをえなかった現実の生活世界の諸問題への政策論的認識を、クラウゼ派の「諸善」論（「生目的」論）が獲得したという点に見いだすことができるであろう。

とくにハインリヒ・アーレンス（Heinrich Ahrens, 1808-1874）は、師クラウゼ（Karl Christian Friedrich Krause, 1781-1832）の「生の諸関係」の視座を継承・発展させて、各人格の有限性を克服する共同体的な相互補完関係に注目し、国家から相対的に自律した多元的な諸「社会 Gesellschaft」（すなわち「生活圏 Lebenskreis」）の語で表現された広義の諸結社の有機的連関構造の中に、各人の「生目的」実現のための不可欠の意義をみつめた。つまり、カントは伝統的な「諸善の秩序」観を解体して諸善の内容を各人の内面の自由にゆだねたが、各人にゆだねられた「善い生」（諸善あるいは「生の目的」）の実質とその実現は、現実の生活世界のあり方、とりわけ社会的協同関係の成熟度に依存していると言うのである。アーレンスのこの認識は、カントが意志論的・アプリアリに基礎づけた各人の自由な自律を、実際に可能にするための客観的諸条件を経験界の側から問い返し、それを私的

事柄としてではなく公共的な基本課題として据えなおしたことを意味するであろう。そのことによって、アーレンスらの自然法論（法哲学）の視座は、ローベルト・フォン・モール（Robert von Mohl, 1799-1875）の理性主義的な国法学的ポリツァイ（内務行政）論と並んで、国家学の近代的再生とアクチュアルな政策課題の提示（目的・手段関係の認識）に深く貢献することになったと思われる。

アーレンスは、一八五二年の主著新訂版（ドイツ語初版）『法哲学、あるいは自然法、哲学的・人間学的根拠にもとづいて』において、ヨーロッパ所有権論史を提示し、物権としての所有権を、人間存在の「物件必要性」という制約性にもとづく「人格的な本源的権利」と規定した。つまり、これまで所有権の根拠とみなされてきた占有・労働・法律・契約は、いずれも所有権の「取得の仕方」であり、所有物の法的根拠（権原）たりえないとして退け、所有権を「人格権」から直接的に導出した。アーレンスが強調するのは、所有物の「個人的要素」と並ぶ「社会的・人類的要素」・「公共団体的（社会的）要素」であり、かれはこの二つの要素の統合形態をゲルマン的・有機的な「全体所有権」に見いだし、フランス革命が定着させた抽象的な個人主義原理とナポレオン法典が規定した私的所有権の排他性とを批判して、実定法における私有権制限諸規定を例示しつつ私的所有権の限界と所有権における共同性という問題を提起した。

所有権における共同性は、私的所有にもとづく競争原理から相互依存Ⅱ協同原理への組み換えを骨子とする社会組織の改革構想を内包する。モールに宛てたアーレンスの一八四〇年一月四日付（ブリュッセル）の手紙には、「国家以外の諸領域を自由な独立と自由な諸結合へと組織すること」について、数名の仲間たちと議論していると記しており、この当時のアーレンスの主要な関心事の一つが「自由なアソツィアツィオンの原理」（同

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

年五月二十九日付の手紙）とその具体化にあったことを物語っている。こうした社会改革構想は、アーレンスの  
ばあいは、自由に描く社会理想というよりむしろ、人間の生の「物件依存性」という根源的制約にもとづく「交  
友的共同生活」の必然性、各人の有限性を乗りこえる「人間本質の無限性」の表れとしての「社交性 *Geselligkeit*」  
という、クラウゼ哲学の規範的人間観にもとづいていた。アーレンスはこの「社交性」の必然性を、「孤立化、  
無制限の競争と分割」に代わるべき「同輩関係 *Genossenschaft* の原理」、「自由な共同 *Vergesellschaftung* の原理」  
と呼び、右のドイツ語版に先立つフランス語初版（一八三八年）および同第二版（一八四四年）では、フランス  
人読者向けに、人間の「社交性 *sociabilité* あるいはアソシアシオン *association* の能力」を、端的に「平等」・「自  
由」と並ぶ「人格権」の三属性の一つとして位置づけていた。<sup>（下）</sup>

このような人間の「社交性」＝共同（協同）性に根拠をおく自由な共同社会への展望は、フランス革命がもた  
らした「私的な個人性原理」による「社会の個人への分解」と、諸結社の法制度的解体とに対する反措定であり、  
諸結社の再生としての「社会」の発見でもあった。しかしアーレンスは、人格的＝空間的（家族とゲマインデ）  
と機能的（各種の目的団体）との二系統の多様な結社・社会団体のはたす役割について、客観的に制約された生  
活諸関係のなかで各人が生目的を達成するために不可欠である相互支援関係という文脈で、すでにクラウゼの人  
間学的哲学から原理的に学んでいた。それを、近代社会における「自由なアソツィアツィオン」の組織化とい  
う実践的な課題意識に結びつける一つの契機になったものは、一八三一年に始まるパリとブリュッセルでの亡命  
時代に体験した、サン・シモン派を中心とする初期社会主義者たちとの交流であったように思われる。かれはそ  
のような体験もふまえて、主著をフランス語で出版し、存命中に一八六八年の第六版まで改訂を重ねたが、同時

に、当初からクラウゼの弟子として、フランスやベルギーで展開される現実の「アソシアシオン」運動に対しては期待と批判の両様の姿勢を示しており、フランクフルト国民議会のちにグラーツの法哲学の教授として初めてドイツ語で出版した上記の五二年版は、あらためてドイツの法哲学の過去と現在への視野のもとで書かれたのであった。

こうした文脈から、本稿が主な分析対象に据えるのは、アーレンスが一八三二年にドイツ語の新聞に寄稿して全十一回にわたって分載されたサン・シモン主義批判の論説である。しかし、それを同時代史的に理解するためのいわば水先案内人として、アーレンスと前後して祖国を捨ててパリでの生活を始めた詩人ハインリヒ・ハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)に注目し、その生々しく批判的な時代証言を参照したいと思う。また、アーレンスの右の新聞論説の連載完了の二ヵ月後に、モールがヴェルテムベルク国王誕生日によせてテュービンゲン大学でおこなった講演で、サン・シモン主義のとくに経済論を主題に据えて多面的に批判していたことも、ドイツにおける名望家知識人の危機意識が生んだ「労働者問題」認識の成立の予兆として、留意にあたいるであろう。したがって本稿が扱う時代は、一八三二年前後には、限定される。

すでによく知られているように、サン・シモン主義が当時の知識人に深い影響を及ぼした状況の一例を、アーレンスより二歳年長のジョン・ステュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)が『自伝』(初版は一八七三年)で示してくれている。「新様式の政治思想をわたくしにだれにもまさって強くふきこんだのは、フランスのサン・シモン派に属する人たちだった。一八二九年と三〇年にわたくしはかれらの著作のいくつかを知った。當時はまだこの人たちも、その思想の初期にすぎず、〔……〕やっと世襲財産制の原理に疑問を発しはじめたところ

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール(上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

ろだった。わたくし自身はそこまでかれらについて行く心がまえさえ全然なかったが、〔……〕人間の進歩には自然の順序があるという説とか、とくに、すべての歴史は組織期と批判期の二つにわかれるという説などには非常に感心した。」「かれらの進展ぶりをわたくしに絶えず知らせてくれた、*au courant* のは、かれらの最も熱心な弟子の一人で、ちょうどそのころかなり長い期間をイギリスで過ごしていた、ギユスタヴ・デシユタル *Gustave d'Eichthal* 氏だった。わたくしは一八三〇年にかれらの首領格のバザールとアンファンタンにも紹介され、かれらの公開講義や信者獲得運動がつづいたかぎりには、かれらの書くものはほとんどすべて読んだ。〔……〕私有財産や遺産相続を動かしたい事実と考えると、生産と交換の自由を社会改良の最後の切札と考える古い経済学は、きわめて局限された一時的の価値しかもたぬことにはじめてわたくしの目があったのは、なかばはかれらの著作によることであつた。』こうしてミルは、サン・シモン派のおかげで、「思想の転換期の特性」をはつきりと認識し、「そのような時代の道德的・知的特徴を人間のもつ正常な属性と思ひあやまることから救われた」と自覚することになったのだが、サン・シモン主義者になつたわけではなく、それを相対化して、「急進論者となり民主主義者となつた」のである。<sup>(2)</sup>

## 二 空想的社会主義とブルジョワ自由主義

一 アーレンスは、フランス七月革命の余波をうけた一八三一年一月八日の学生と市民による「ゲッティンゲン蜂起」の騒乱の中で、それを主導した三人の私講師の一人として、市参事会員にも選ばれたが、まもなくハノ

「フアー王国の軍隊による鎮圧にともない、同国を逃れてブリュッセルへ至り、以後十七年余りに及ぶ亡命生活を余儀なくされた。その間、亡命四年目の一八三四年の秋に、カトリック勢力に対抗して新設されたばかりのブリュッセル自由大学に哲学の教授として迎えられるが、それまでの三年半余りのあいだに、アーレンスはフランス語に熟達し、フランス初期社会主義、とくにサン・シモン派と交流して、その宗教観や社会問題対応論に不信と不満を抱く一方、師クラウゼの哲学の意義を再確認して、それをパリの教養層に知らしめる機会に恵まれた。それは、一八三四年の初めにアーレンスがパリ大学で、カント以降のドイツ哲学の歴史、とくにクラウゼに依拠した「心理学」にかんする公開講義をおこなったことである。

アーレンスのこのパリ講義は、三二年から公教育大臣の職に就いていたギゾー (François-Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874) からの依頼を受けてなされたものであり、それを斡旋したのは、ギゾーの片腕ともなったパリ文科大学の「古代哲学史」講座の教授クーザン (Victor Cousin, 1792-1867) であった。その事情について、のちに死の二年前 (一八七二年) に、同じクラウゼ門下のレオンハルディ (Hermann Karl von Leonhardi, 1809-1875) がプラハで編集していたクラウゼ派の雑誌『ノイエ・ツァイト』に寄稿した、アーレンスの事実上最後の作品と目される、教育改革論をふくむ長文の論説のなかで、かれは当時を回想してつぎのように記している。

「クラウゼの哲学体系を、わたくしが人間学・心理学・形而上学の基礎理論のかたちで初めて叙述したのは、(久しく絶版になっている)『哲学講義 Cours de philosophie』(全二巻、一八三七年)においてである。この著作は、わたくしがフランスの教育省 (ギゾー) の委託を受けて一八三四年にパリでおこなった連続講義にさらに手を加えたものである。その講義に先立って、わたくしはドイツの最近の哲学の歴史について私的な講義をおこな

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール (上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

つたのだが、そのあとで、わたくしの説明したクラウゼの体系の方向性を非常に重要なものととらえて、その体系、とくに分析的および心理学的な部分の知識をフランスで広めることが願わしいと考え、わたくしにあの公開講義を依頼するように教育省にはたきかけたのは、クーザンである。フランスでわたくしに開けた前途の見込みよりも、一八三四年秋のブリュッセルへの招聘のほうを選ぶことをわたくしに決心させたのは、完全に独立した哲学的活動への見込みであった。『哲学講義』は、のちにユトレヒトのニウエンハイス Nieuwenhuis 教授によってオランダ語にも翻訳された。<sup>(3)</sup>」

ここに述べられているアーレンスの『哲学講義』は、実際には三六・三八年に『政府の後援のもとにパリでおこなわれた心理学講義 Cours de psychologie』という書名で、「ブリュッセル自由大学の哲学の教授」の肩書きでパリで公開した二巻本をさしている。その原型は、三四年のパリでの公開講義だというのである。

その『心理学講義』第一巻に掲げられた一八三五年九月十三日付の序文 (Preface) にしたがえば、「わたくしはここに哲学の公論に付す本著作は、公教育大臣であったギゾー氏が一八三四年の二月にわたくしに担当させた講義の産物であり、それは、クーザン氏が、哲学研究に心をくだいて、自発的にそれをかれに提案したことにもとづいていた。」それゆえにアーレンスは、「その講義の出版の日に、一人の若者の研究の第一歩を好意的に後押ししようとしてくれたこの二人の傑出した学者に対する感謝の言葉をおおやけに呈上」することを忘れなかった。ところで、「その講義でわたくしが設定した目的は、各講義の対象である諸問題について哲学がドイツで達成している主要な成果を、ある体系的な方法で、フランスへ伝えることである。<sup>(4)</sup>」

その講義主題は、導入部としての心理学の歴史および講義計画からはじまり、自然一般と人間の本性、精神と



身体の関係、覚醒と睡眠、夢遊催眠と動物磁気と狂気（以上、第一巻）、精神一般の存在、精神の諸能力（思考・感情・意志）、思考と知識、想像・反省・理性、心理学から形而上学への移行、神の存在証明をめぐる歴史（アーセルム、デカルト、マルブランシュ、スピノザ、ライブニッツ、カント）、神と世界との関係（結論としての人間の個人的かつ社会的な使命）（以上、第二巻）にいたる全十二講である。第一巻は「一般人類学をふくむ」、第二巻は「本来の心理学、および形而上学の一般的な部分をふくむ」という副題をそれぞれもっており、講義の主題は「心理学」をこえて哲学の基本的諸問題にわたっている。第二巻に付された三七年十月三日付の序文（*Avant-propos*）では、「心理学から形而上学への移行は、フランスではほとんどまったく知られていないから、わたくしは、人間の精神が神の存在の確信へと徐々に高められてゆかざるをえないその理路を説明することによって、この移行を明らかにすることとくに意を用いた。」と述べ、「シェリング、ヘーゲルの諸体系とクラウゼの体系とのあいだにある大きな差異」に留意しつつ、「世界、人間の社会生活、および人間の使命にかんする諸教義」に注目するのである。<sup>(5)</sup>

同じ序文の末尾では、「書肆の願望に譲歩して、わたくしは外的な題名について、心理学という語を哲学の講義という語に入れ替えた。たしかにこの題名のほうが本書の全体にいつそうふさわしい。つまり、本書では哲学の重要な題材をすべて扱っており、そのなかで心理学は最も脆弱な部分をなしているにすぎないからである。」と述べているのだが、その第二巻も第一巻と同じ題名の扉で出版された。<sup>(7)</sup>このかんの経緯は不明だが、以後アーレンスは、本書に言及するさいには、上記の例のように、しばしば留保もつけずに『哲学講義』と表記している。

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

ところで、上記の『ノイエ・ツァイト』掲載の論説からの引用の後段では、七月王政下でフランス哲学界のみならず教育行政面でも実質的な主導者の地位につくことになる自由派のクーザンから高評価をえて引き立てられたことを明かしつつ、政権の中枢に近い講壇哲学の指導者の庇護のもとに立つことを潔しとしなかったアーレンスの自負と自立志向が看取される。

ヴィクトル・クーザンは、感覚・理性・意志の三能力の総合、あるいは大学での講義録の一つ『真・美・善』などにみられる調和Ⅱ折衷論すなわち「エクレクティスム *eclectisme*」の主唱者として知られるが、それは、十八世紀（とくにコンディヤック）の感覚論→唯物論の潮流に對抗して、かれのデカルト著作集の編集とプラトンの翻訳の仕事に示されるようにデカルトの理性原理からギリシア哲学の復興を展望する意図に立ち、革命の混乱・対立を思想的に克服する役割を担いつつ、不断に向上をめざす人間精神の理性的・総合的なたらしきを重視するという意味での一種の「スピリチュアリスム *spiritualisme*」にはかならなかった。同時に、クーザンは、ギゾーの初等教育法（三三年）の実質的作成者たる任務をふくむ教育行政改革を担い（四〇年にティエール内閣の公教育大臣）、政治的には、カトリックに對抗して教育の世俗化を推進した自由主義者（政体論としては立憲君主政論者）であった。

クーザンの公的な経歴の出発点は、一八一五―二〇年にパリ文科大学の「哲学史」の教授ロワイエ・コラーレ（Pierre-Paule Royer-Collard, 1763-1845）の代講講師として講義を担当したことであり、そのかん、クーザンはドイツ哲学の現況を知るために一七年にヘーゲル、シャライエルマハー、ゲーテなどを、翌年にはヤコービとシェリングを訪ね、それ以後もドイツの学者たちとの交流をつづけた。二〇年から始まった政治の反動化は、クーザン

に政府による講義停止処分をもたらすが（二四年のドイツ旅行時にはプロイセン当局によって六ヶ月勾留された）、二七年末の代議院（下院）選挙での自由派の勝利と翌年初めのヴィレール内閣の退陣とともに、クーザンはソルボンヌで「現代哲学史」講座の助教授に任命されて講義に復帰し、熱烈な大聴衆に迎えられる。三〇年には「古代哲学史」講座の教授職に移り、アカデミー・フランセーズ会員に選ばれ、七月王政では、クーザンはギゾーやティエールによって登用される。三一年に公教育王立評議会委員として初等教育制度の改革のためにドイツの諸都市を視察、三二年には貴族院（上院）議員に選任され、三五年には師範学校（四五年に高等師範学校 *Ecole normale supérieure* と改称）の校長に就任する<sup>(8)</sup>。

クーザンが七月王政の「公認哲学」の主導者になったのは、かれが理性の能力を信頼する「リベロー」の代表として、フランスの初等・中等・高等教育の体系化と世俗化をつうじて国民的統合・安定化を実現することをめざし、その中核に哲学教育を位置づけてカトリック勢力の攻撃から守護する役割を担ったからである。とくにかれが主導した一八三二年の中等教育（リセ *lycées* とコレージュ *colleges*）のカリキュラム改革では、心理学・論理学・倫理学を導入し、ロック、デカルト、ベイコン、マルブランシュ、コンディヤックを教材に取り入れて、哲学史の教育も刷新した<sup>(9)</sup>。また、学問上では、上述のようにドイツ哲学の素養を身につけていたクーザンは、師口ワイエ・コラールがフランスへ導入したトマス・リードを中心とするスコットランド「常識」哲学も、すでに吸収していた。したがって、アーレンスが三三―三四年の冬の上述の講義で論じた「心理学から形而上学への移行」はクラウゼに依拠したものであったが、この主題は、「エクレクティスム」の立場から調和と教養の広い視野で哲学教育を重視していたクーザンにとっても、たしかに興味を引いたはずなのである。

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

二 つまり、三四年のブリュッセルの教授就任までのあいだに、アーレンスは、一方でいわゆるフランスの空想的社会主義、とくにサン・シモン派と交わり、他方ではルイ・フィリップの七月王政における大ブルジョワ寡頭制を支えた自由派の学理的指導層の知遇も得ていたわけである。アーレンスは、サン・シモン派の中では、とりわけ最晩年のバザール (Saint-Amand Bazard, 1791-1832) と親交を深めており、三二年のその死をかれは大変悲しみ、バザールは死の直前にもアーレンスとの面談を欲していた（それは自分の不在のために実現しなかった）旨を、アーレンスはパリからクラウゼに宛てた手紙（三二年八月十三日付）で記している。<sup>(10)</sup>そしてそのクラウゼも、それから一ヶ月余りのちの九月二十七日にミュンヘンで卒中のために急逝する。

その前年、三一年にゲッティンゲンを追われてミュンヘンに来ていたクラウゼは、大学の教授職への就任を試みたが、フランツ・フォン・バーダーらによる推薦があつたにもかかわらず、シェリングの反対によつてその生涯最後の希望をくじかれていた（三二年七月<sup>(11)</sup>）。九月の急逝後は、かれより先に同地に来ていた弟子のレオンハルデイが、クラウゼのわずかな遺産の管理者となるとともに、師の遺稿を受け継いで、その編集・出版の事業に着手する。<sup>(12)</sup>

アーレンスはフリーエ (François Marie Charles Fourier, 1772-1837) と個人的接触があつたのではないかと推定される。フリーエは一八二九年五月、自分の教説の普及を意図してサン・シモン派の集会に出席したが、同派に対してきわめて否定的な印象をうけ、それ以降、繁栄する同派をかなり一方的に非難したようである。そして三一年十一月の同派の分裂後は、いち早く翌年初めにかけてジュール・ルシュヴァリエ (Jules Lechevalier, 1800-1850) とアベル・トランソン (Abel-Étienne-Louis Transon, 1805-1876) が同派を捨ててフリーエ派に加わり、かれ

らの呼びかけは多くの転向者を生んだから、フーリエとその支持者たちはアーレンスの近くにいたことになる。<sup>(13)</sup>のちにアーレンスは、その主著の第二版（一八四四年）で「社交性あるいはアソシアシオンの能力」について論じたとき、フーリエ派の功績を、「人々を純然たる形式的な政治の先入見から解放し、社会科学の真に積極的な領域へ引き入れる」という点に認めつつ、フーリエ本人については、「すべての過去と絶縁し、人類の道德法則のすべてを誤認して」、「アソシアシオンの根本諸条件すら認識できなかった」と批判した。つまり、フーリエは「集団原理によって」個人主義を破壊し、人々の好みの充足が約束されることによって人々を結びつけ、「かれの時代のすべての唯物論者たちから大いに賞賛されたこの利害の原理によって人々をしぼりつけようとした」のであり、「万人の万人に対する戦争」というホッブズの原理<sup>(14)</sup>が、そこでは「情念の引力 attractions passionnelles」による「道德的戦争」としてたちあらわれるだろう、と評している。アーレンスにとって「まさにアソシアシオンとは、統一性と多様性、共同性 la communauté と個性 l'individualité という対立する二つの要素の調和的な原理なのである」。<sup>(15)</sup>

アーレンスがこのように当時交渉を持った空想的社会主義とブルジョワ自由主義とは、断絶しているようにみえるが、フランスの政治的・社会的現実のもとでは事態はそう単純ではない。第一に、広く知られているように、サン・シモンの「産業者」の地位はいまいだが、私的所有を前提にした産業体制の自律化のヴィジョンという意味では、「サン・シモンの基本的な目標は、フランス資本主義の全面的開花であった」といってよいし、かれの弟子たちも、この目標のもとで、相続財産の廃止を主張しつつ、鉄道・運河などのインフラ建設の実践活動に従事したから、かれらは全体として封建遺制に対する「ブルジョワの立場」を担っていた。しかし、そういう

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

う産業社会を人為的につくりだすことを構想しなければならなかったところに、イギリスに比しての「フランス資本主義じたいの幼弱性」が表れていた。<sup>(16)</sup> いいかえれば、空想的社会主義とブルジョワ自由主義の両者には、カトリック保守派・極右（過激）王党派という共通の敵があり、すでに復古王政期にロワイエ・コラールやギゾーら「ドクトリネル」と呼ばれる自由主義的立憲派が一四年のルイ十八世の公布した「憲章（シャルト）」の理念を代弁して主張していた宗教的寛容と出版の自由は、封建遺制にともに対抗する社会主義（とくにそこに潜在した分権的志向）と自由主義とを架橋する要素になりえた。

第二に、これもすでによく知られていることだが、ギゾーは政治家である前に歴史家であったから、ピエール・ロザンヴァロンが強調しているように、かれの目標は「革命を終結させること」、そのために「革命の知的基盤を定義しなおす」こと、つまり「革命の真の諸原理を救い出し、それらを安定した諸制度のなかに移し変えること」にあり、そのために革命の世代を自分たちから切り離し、十三世紀にも及ぶ「権威と自由の闘争」という独自の「文明史」観に立って、「理、性、の、主、権、、政、治、的、能、力、、認、識、、に、よ、る、代、議、制、という三つの概念」を用いていわば歴史学を政治空間へ導入した。<sup>(17)</sup> いいかえれば、ギゾーは「文明」の担い手としての「人間」の具現化をフランスの国民的階級としてのブルジョワジーに見いだしたから、七月革命が自由派を権力に近づけたことによって、かれの、そしてドクトリネルの自由主義は「体制の思想」となった。<sup>(18)</sup> その意味で、ギゾーとクーザンが注力した初等教育法や「ユニヴェルシテ」と呼ばれる中等教育統轄機関の拡充など一連の教育改革が、教育による社会的上昇に道を開きつつ、同時に教育への政府の指導をとおしてブルジョワジーの社会的・文化的支配への寄与を志向していたことが留意される。<sup>(19)</sup>

革命が生み出した新しい国家は、市民の育成を、つまり公教育を必要としていたということは、裏からいえば、『人権宣言』が理念的に描いたような自律した、私的自治を担いうる近代的個人が現実にはまだ十分に成立していないことの表れであり、サン・シモンやフリーエも当然この同じ事態に直面していた。かれらは通常「社会主義者」としてくられるが、とくに前者は、上述のように近代的個人とその社会を自由な「産業者」のイメージで構想したという点では自由主義にきわめて近接した位置にあり、ただ、サン・シモニアンたちは、ギゾーらが「理性の主権」の概念で正当化した大ブルジョワジーの政治支配（財産秩序にもとづく代議制）を拒否したから、社会そのものの組織化つまり「アソシアシオン」に未来を託すことになった。ところが、後述のように、とくに分裂（一八三一年）後のアンファンタン主導下のサン・シモン主義は、権威主義的「秩序」志向（宗教的地位階制）への傾斜をいっそう強め、自由派から離れて正統王朝派への接近さえも示した。一方、フリーエと弟子たちは、労働が最適化した理想社会の建設実験にまで突き進む。

そして第三に、クーザンは貧しい職人の子として生まれたが、かれは、ナポレオンがイデオログの自分からの離反をきらって一八〇三年に廃止した学士院第二部門（一七九五年創設の「道徳と政治の科学類」）を三二年に復活させることに中心的な役割をはたし、その「道徳・政治科学アカデミー」<sup>(20)</sup>は哲学史研究を振興しただけでなく、はやくも三四年に労働者問題の調査に着手したことが示すように、現実の社会問題への関心は政治的立場の違いを超えてひろがりつつあった。すでに三一年十一月にリヨンの絹織物工の蜂起があり、おまけに翌年のパリはコレラの蔓延にみまわれた。それより前、二五年にサン・シモンが『新キリスト教』の公刊直後に没してのち、ただちにアンファンタン以下サン・シモニアンによる伝道活動が始まっていた。ルイ・シュヴァリエがパリ

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

の「野蛮人 *barbares*」、「未開人 *sauvages*」、「浮浪者 *nomades*」、つまり新しい「危険な階級、労働階級」の群生に対する当時のさまざまな呪詛の声を例示しているように、また、そのゴロペール・カステルが、賃金労働の近代性の反面でフランスにおいても出現した大衆的窮乏としての「貧困問題 *paupérisme*」の発見とそれへの危機意識のひろがりを描き出しているように、「十九世紀前半の特徴とは、ある種の貧困、つまり富の増大と文明の進歩がもたらしたかのようにもみえる窮乏 *misère* が意識にのぼるようになったこと<sup>(22)</sup>にあ」った。たとえばアルマン・ド・ムラン (*Armand de Melun, 1807-1877*) のような正統王朝派の一部でさえ（イギリスのトーリー党の人道主義者たちのように）、そうした認識を共有して「恐るべき窮乏」を改善しようと尽力する多様な人々の一翼を形成していた。

したがって、そのような階級的「窮乏」という社会問題の原因と対策にもかかわる社会構造自体への視野という点でも、生産と消費の不均衡に着目してスミス理論の修正を企図したシスモンディ（『経済学新原理』は一八一九年）を重要な一先駆として、それをたんに物質的問題（生産性の裏面としての雇用の不安定）としてではなく、カステルも注目しているように、むしろすぐれて道徳の問題、一種の野蛮状態、社会性喪失状態ととらえて、恒常的な不安定性を社会的紐帯の喪失に重なる認識がすでに醸成されていた。それは、いいかえれば、革命がなしとげた旧中間団体の法的一掃がもたらした負の遺産をめぐる問題にはかならず、それを克服するための民衆の連帯のあり方を社会の「組織化」の問題ととらえて模索した社会主義諸派は、それを「アソシアシオン」と呼び、これが三〇―四〇年代には時代の声となった。

しかも第四に、フランス革命が軌道を敷いた非キリスト教化（カトリックの政治的支配の排除による「文化革



命」あるいは「習俗の革命」<sup>(24)</sup>を革命の成果として前提とするかぎりでは、社会問題への対応論は、民衆を道徳的に統合する機能を何らかの共同体的新宗教に託す試みを排除することはできなかった。社会主義諸派がこもごも「人類教」的に「世俗宗教」の形態をとおして提起したさまざまな新社会構想のいわば苗床としての社会的分裂という現実、革命期に端を発する公教育の世俗化を擁護しさらに推進しようとしたギゾーら七月王政の自由主義的主流派にとっても、政治システムの根幹にかかわる基本課題にはかならなかった。それに対してギゾーが用意した回答は、「すぐれた能力の持ち主 la supériorité」による民衆に対する「新たな後見関係 nouvelles tuelles」<sup>(25)</sup>という「社会契約」にもとづく社会秩序の再建であり、その意味での制限選挙の正当化であって、「理性の主権」によって根拠づけられ現に政治実践もなされたものは結局大ブルジョワジーの寡頭支配に帰着したから、さまざまな「アソシアシオン」志向の出現を阻止することはできなかった。信徒の「良心の権利」・「自由な理性の権利」を求めてローマ教会の権威主義と闘ったカトリック民主派のラムネ (Félicité Robert de Lamennais, 1782-1854) の独自の運動もふくめて、社会の秩序をめぐるそうした諸対抗は二月革命へと流れ込んでゆく。

### 三 パリのハイネの人物評

#### (一) 『ドイツ宗教・哲学史考』とサン・シモン派

一 ところでクーザンの口利きで実現した三四年初めのアーレンスのパリ大学での公開講義は、「レオンハルデイが書きクラウゼが校閲したクラウゼ哲学の要約を利用して」<sup>(26)</sup>といわれるが、ドイツ哲学の近況の紹介と

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール (上)

して成功を収めたようである。ハインリヒ・ハイネの作品『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』<sup>(27)</sup>（以下、『ドイツ宗教・哲学史考』と記す）は、アーレンスのこの講義を聴いて触発され、あるいは一定の影響をうけたものだという推定も存在する。

詩人ハイネは、七月革命の報に接して奮起、翌三一年五月に祖国プロイセンと訣別してパリに着き、その翌年には「フランスの状態」を『アウクスブルク一般新聞』に継続寄稿したり、『ロマン派』を書き始めたりしていた。ドイツでは五月末に民主派・自由派によるハンバッハ祭が三万人を集め、ただちにメターニヒと各国政府により言論弾圧が強化される。ハイネより少し前に亡命していたアーレンスは、「ゲッティンゲン蜂起」を主導した三人の私講師の一人テオドル・シュスター（Theodor Schuster, 1808-1872）とともにパリでハイネと交流し、三者はパリの亡命者団体であった「ドイツ人民協会」に参加した。「アーレンスは、この協会の印刷物の編集力を強化する方策を協議するために」一八三三年十二月二十二日にハイネのもとに集まった文筆家たちのサークルの一員であった。<sup>(28)</sup>したがって、三四年初めのアーレンスの公開講義をハイネも聴いたであろうと「かなりの確度で」推定することができ<sup>(29)</sup>る。

ハイネの『ドイツ宗教・哲学史考』の成立の背景については、クラウス・ブリークレーブ編集の『ハイネ全集』では、本書の注釈のなかで、一八三七年に著述家ムント（Theodor Munt, 1808-1861）がつぎのように指摘していることを紹介している。「ドイツの哲学と宗教にかんするかれの論説は、現在ブリュッセルにいる才知豊かなアーレンスが、当時、政府の依頼でこれらのテーマについてパリでおこなった講演にとりわけ示唆を得て生まれた。ハイネ自身はこの著作をたいしたものではないとみなしているが、わたくしには率直に言って、最も深遠

なテーマをあまりにもきれいにおもしろく仕上げて、若い女子寄宿生やお針子嬢たちでさえ楽しく読め、読んだあとには、もう哲学が全部わかったと言いかねないようなやり方は、いただけない。<sup>(30)</sup>」ムントが批判したのはハイネの筆の運び方ではなく、より根本的には、感覚論をキリスト教と結合させる立場に立って、ハイネの汎神論的なキリスト教観を批判した。<sup>(31)</sup>

マンフレート・ヴィントフルを総編集者とするデュッセルドルフ版『ハイネ全集』も、右のムントの指摘の前段を引用して、ハイネのアーレンスへの「依存」を最初に語ったものとして紹介しているが、ヴィントフル自身はこのムントの見方には否定的である。なぜなら、「アーレンスのパリ講義の時点では、ハイネの全体構想はすでに固まっており、第一巻はすでに完成して世に出ていた」し、内容の点でも、とくに神観念については、アーレンスがクラウゼ的な「観念論的・人類的な漸層論 *Gradationslehre*」に立って「経験的なものから絶対的なものへの漸進的な認識進歩」を想定するのに対して、ハイネは汎神論に立つから、両者の見地は異なると考えられるからである。しかしそれでも、「当時はまだ書かれていなかった続編〔第二巻・第三巻〕にアーレンスが影響を及ぼした可能性は残るだろう。かれはとくにライプニッツ以降のドイツ哲学に取り組んでいたからなおさらそうである」、とヴィントフルは認めている。<sup>(32)</sup>

二 ムントの個人的感懐とは無関係に、ハイネの『ドイツ宗教・哲学史考』は、自由を求める近代的生命力の躍動する批判的精神が生みだしたドイツ思想史の簡明な展望であり、ヘーゲルが死んで三年後（ゲーテ没後二年）という段階での同時代人の意識と情報参照世界を映しだしている史料としても、こんなにちなお有益である。しかも、パリでドイツ精神史をフランス人に紹介するというハイネの意図があったから、一方でフランスの感覚

論や唯物論、フランス革命の思想を既知の前提にして参照するような相対化視点が、現代的な新鮮さを維持させている要因の一つであるように思われる。第一巻は「宗教改革とマルティン・ルター」、第二巻は「ドイツ哲学革命の先駆者。スピノザとレッシング」、第三巻は「哲学革命。カント、フィヒテ、シェリング」、という当初のフランス語雑誌版に付された表題は各巻の重点項目を指すにすぎず、実際の論究対象ははるかに広大であり、かつハイネらしく具体的挿話で彩られている。そこに貫かれているものは「思想の自由」の形成というヒューマンな視点であり、「宗教革命」、「哲学革命」をへて、ドイツでつぎに来るべきものとしての「政治革命」へ、という展望と確信である。

そこでのハイネの柔軟な筆は魅力的に多岐にわたっているが、かれの世界観の根本にかかわる論点の一つとして、汎神論 *Pantheismus* と超越神論 *Deismus* との対比に注目しておこう。すでに第一巻で、まず自然崇拜に由来する古代ゲルマンの多様な民間信仰に汎神論的世界観をみとめたうえで、つぎに、善悪二元論に立つキリスト教がそれらを「悪魔」視して肉を敵視する禁欲主義を説いたのに対して、ルターは「酒と女と歌とを愛しえない男は一生涯ばかだ」と言つて、魂だけでなく肉をもつ人間の本来の姿を復権させ、それによって「宗教は再びほんものの宗教になった」ととらえる。第二巻では、近代哲学の父をデカルトとし、その唯物論的傾向を継承した「長男」をロック（フランス唯物論の始祖）に、観念論的傾向を受け継いだ「次男」をライブニッツにみとめたうえで、「三男」たるスピノザを「こんにちのドイツで思想界の唯一の支配者となった男」と位置づける。「スピノザは、こう説く。ただ一つの実体がある。それは神である。この唯一の実体は無限であり、絶対的である。すべての有限のものはこの実体からわかれて出てくる。それらのものはこの実体のうちにふくまれていて、この実

体のうちに出没する。それらのものはただ相対的な、一時的な、偶然的な存在にすぎない。この絶対的な実体はわれわれ人間には、無限の思考という形式と無限の延長という形式であらわれてくる。この二つ、つまり無限の思考と無限の延長とは、絶対的な実体の二つの属性である。われわれ人間は、ただこの二つの属性しか認識することができない。」「人間の精神は神の無限の思考の一光線にすぎない。人間の肉体は神の無限の延長の一原子にすぎない。神こそ人間の心とからだとの無限の原因であり、生みいだす自然、*natura naturans* である。」<sup>(33)</sup>

ハイネにしたがえば、「汎神論の神と超越神論の神とは、つぎの点で区別される。つまり前者は世界そのもののなかにいるが、後者は世界のまったく外に、いいかえると世界を超越しているのである。超越神論の神は上から世界を、自分から分かれてきた一つの施設として支配している。ただし、その支配の仕方については超越神論者の意見はいろいろとちがっている。たとえばヘブライ人は、この超越神をやかましくなりつける暴君だと思っている。キリスト教徒はやさしい父親だと思っている。そしてルソーの弟子のジュネーヴ学派の者はみな、この超越神を、自分らの父が時計をつくるようにこの世界をつくりあげたかしい技師だと思っている。」「超越神論者には、魂だけがとうとういものになる。というのは、超越神論者は魂を、いわば神のいぶきとみなしているからだ。」だから「ユダヤ人は肉体をつまらないものとみなした。」「キリスト教徒はこのユダヤ人の道をさらにつきすすんで、肉体を非難すべきもの、わるいもの、いや、わざわいそのものとみなすようになった。」キリスト教は「あまりに気高く、あまりに清らかで、あまりに立派すぎたので」、「実際にこなうことはけつしてできなかった。」「このキリスト教の根本思想を実行しようという試みは、きわめて無残な失敗に終わった。そしてこの不幸な試みのために人類は、かぞえられないほど多くの犠牲をはらってきた。」「だから、これからの新しい社

会制度の第一の目的は、物質つまり肉にもとの権利をとりもどしてやること、「……」物質を精神つまり魂と和解させることである。<sup>(34)</sup>

汎神論についてさらにいえば、「神は世界そのものである。〔……〕神は〔植物や動物として、さらには〕人間として、最もみごとに公然とあらわれる。〔……〕神は人間に自覚される。〔……〕この神の自覚とその自覚の表現とは、個々の人間ではなく〔世代をつないで〕人類全体においてなされる。」<sup>(35)</sup>

「フランス唯物論の原理を基礎とする政治革命に対して汎神論者はけつして敵対するものではなくて、むしろその味方である。しかもこの味方は、フランス唯物論よりもっと深い泉から、宗教的な「魂とからだとの」総合からその確信をくみとっているのである。」<sup>(36)</sup>つまり、フランスの政治革命の近代的意義を、ドイツの汎神論者は、いわば長期にわたる哲学史の視野から、はつきり承認しているのだとハイネは言うのである。

「サン・シモン主義者がこうした汎神論の立場を多少とも理解して、それを実現しようとした。けれどもサン・シモン主義は不便な土地で成長した。まわりをとりまく唯物論者に少なくともしばらくのあいだはおさえつけられてしまっていた。サン・シモン主義者はフランスよりは、むしろドイツでより正しく評価されている。というのは、ドイツこそ汎神論の最も栄えやすい土地であるからである。汎神論はドイツの最も偉大な思想家、最もすぐれた芸術家のいだいている宗教である。超越神論はドイツでは理論的には、とっくのむかしにつぶれてしまった。〔……〕超越神論はドイツでは〔……〕無思慮な人民大衆のあいだに、どうにかのこっているだけだ。こうした事情は口に出しては言わないが、だれでも知っていることだ。つまり汎神論はドイツでは公然の秘密になっている。たしかに、われわれドイツ人は超越神論から抜け出すほど成長してきた。われわれは自由人である

から、やかましくどなりつける暴君などはいらない。<sup>(37)</sup>」それがドイツの現状だと言うのであり、ここでは汎神論を介して、ハイネはサン・シモン主義とつながっている。

ハイネが「レッシングはマルティン・ルターの後継者である」と述べるのは、ルターが「ドイツ人をカトリック教の伝統から解放した」のに対して、今度は新たに「専制君主」になった「聖書の字句」からドイツ人を解放しようと奮闘したのがレッシングだったとみなすからである。「レッシングの言うには、字句の解釈というのがキリスト教のかぶっている最後の皮だ。この皮をとってしまえば、はじめてキリスト教の精神があらわれるのである。ところでこのキリスト教の精神とは、「……」その頃のドイツであらゆる形で通用していたもの、つまり超越神論そのものである。」そのレッシングが「世間から誤解され、にくまれ、ののしられて死んだ」その同じ一七八一年に、「カントの『純粹理性批判』があらわれた。」「この本でドイツの思想上の革命がはじまった。このドイツの思想革命はフランスの政治革命と不思議なほど似ていて」、「ライン河の左岸と右岸とで等しく過去のきずなは断ち切れ、「……」フランスではこれまでの社会制度のかなめ石であった王政が倒されたが、ドイツではこれまでの思想支配のかなめ石であった超越神論が倒されたのである。」「いま死の覚悟をしているのは、老エホバである。」「ほら、鐘が鳴る！ ひざまずけ！ 滅びゆく超越神に最後の晩餐をささげるときだ。」——こうして第二巻が終わる。

したがって第三巻のはじめに登場するカントは、「現象」と「本体」の区別によって「人間の認識の限界を示す」と同時に、「神の存在についての超越神論者の証明を破壊した」から、「超越神はカント以後は思弁的理性の範囲内では、滅びてしまった」。ただし、「実践的理性を魔法の杖のように使って、「一度は理論的理性に殺され

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

ていた」超越神の死体に活を入れた。<sup>(39)</sup>」このようにカントからはじまった思想運動は、その「批判精神」によってドイツに「哲学革命」をもたらし、「哲学はドイツ国民全体の問題となった。」まもなくフイヒテは、「経験の対象となるものだけが存在するといわれうる」と考え、超驗的観念論は無神論へいたる。<sup>(40)</sup>シェリングの自然哲学は、「神は自然と思考、つまり物と心とが絶対的に一致したものである」と考えるから、汎神論的となる。しかしシェリングは、その「絶対的なものを知力で直観しよう」として、疲れ果ててカトリック教に改宗し、没落した。かれの哲学界での「権力をしだいに横領し」、「ついにこの師匠をくらやみへ追放してしまった」のは、弟子ヘーゲルである。「ドイツがライプニッツ以後に生みだした最大の哲学者、偉大なヘーゲル」は「自然哲学を完成して、完全な体系をつくりあげ」、「わがドイツの哲学革命は終わった。」つぎに来るのはドイツの「政治革命」だ。<sup>(41)</sup>

「むかしのシェリング氏」は「あの偉大な自然哲学を復活させた。」だが、いまはヘーゲルによって「思想界の玉座からつきおとされ」、「廃位された」。シェリング氏は、「節操のあるヘーゲルとはまったくくらべものにならぬ。」「シェリング氏は、実践的かつ理論的な絶対主義の次の間でもむしろのように身をくねらせ、精神をしばる鎖をきたえるイエズス会士の洞窟で下働きをしている。」「ミュンヘン市でわたくしはシェリング氏が例の大きな、にぶい目をし、元氣のない、ぼんやりした顔つきで幽霊のようによろめき歩いているのを見たことがある。それこそおとろえた栄光のいたましい姿である。」<sup>(42)</sup>——クラウゼの最後の希望をもついえさせたのは、このような心身の力をなくして没落し保守化したシェリングだったことになる。

三一 一八三五年四月には、この『ドイツ宗教・哲学史考』のフランス語版（上述の『ドイツ論』）が出たが、



そこには、ハイネはサン・シモン派のアンファンタン (Barthélemy-Prospér Enfantin, 1796-1864) へのつぎのような献辞を掲げた。——「エジプトのプロスペール・アンファンタンへ。あなたは、ドイツにおける諸思想の経過、つまりそれが最近どのように展開しているのか、また、この国の精神運動が〔サン・シモン派の〕教義の総合とどのような関係にあるのかを、知りたいと望んだ。あなたがこの問題について自分に知識を与えてほしいとわたくしに頼んだという、わたくしに示してくれた光栄に、わたくしは感謝しており、また、こうしてあなたと空間を越えて語り合う機会を得ることができて、わたくしはうれしく思う。あなたに本書を呈上する無礼を許したまえ、本書はあなたの思索の諸必要にこたえるものとわたくしは信じたい。たとえそれがどうであれ、尊敬の念をこめた共感のしるしとして本書を受け取ってくれるようお願いする。アンリ・ハイネ<sup>(43)</sup>」しかし一八五五年の新版ではこれが削除される。

ハイネとサン・シモン主義との関係については、たとえば、井上正蔵氏が『ロマン派』と『ドイツ宗教・哲学史考』とを評して、「この両書には、霊に対する肉、唯心主義に対する物質主義、観念的絶対主義に対する空想的社会主義の勝利の思想が、サン・シモンイズムの精神が赤い一本の糸のように貫いている」<sup>(44)</sup>と述べているように、よく知られていた主題ではあるが、そのこ、とくにデュッセルドルフ版全集の編集作業をつうじて、その詳細が明らかになりつつある。ヴィントフルにしたがえば、ハイネはパリに来る前に、すでにハンブルクでの最後の数ヶ月のあいだに、バザールら弟子たちによる『サン・シモンの教理解説』(第一年度分・第二年度分とも初版は一八三〇年に公刊)を読んで、「ドイツを去る意思をさらに強めていた。」そしてパリ到着後すぐにアンファンタンやミシエル・シュヴァリエ (Michel Chevalier, 1806-1879) ら指導部と交渉をもち、かれらの集会に参加

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール (上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

したり、シュヴァリエが編集していた『グロブ Le Globe』誌で学んだりした（個人的接触が最も緊密であった時期は、パリに来た三一年五月から翌年三月までと、アンファンタンが監獄拘留から釈放されてエジプト行きの準備をしていた三三年八・九月とである<sup>(45)</sup>）。

こうしてハイネは、「サン・シモン主義の教理を学ぶことによって、感情から意識が、たんなる予想から概念的な図式が生まれ」る段階にいたる。しかしこの時期に「ハイネ自身は、自分をサン・シモン主義者であると認めたことは一度もなく、そのようにうけとられないことを重要視した。」ハイネが表明しているのは、「プロテスタンティズムと汎神論とへの信仰告白」である。一方、サン・シモン主義者の側も、ハイネを「客人として歓迎」はしたが、「厳格な選抜と位階的編成を重視する集団の正規メンバーとみなしたことは一度もなかった。」<sup>(46)</sup>

両者のあいだのこのようなずれが顕著にあらわれたのが、上述のフランス語版『ドイツ論』初版でのハイネのアンファンタンへの献辞と、それに対するアンファンタンの応答である。禁固刑があげたアンファンタンは、パリの理工科専門学校の前身を卒業した技師としてスエズ運河の建設を夢見て三三年九月末にエジプトへ旅立ち、三七年一月にフランスへ戻るが、そのかん、ナイル川の改修工事に従事していた三五年十月十一日付でハイネ宛に手紙を書いている。その中でアンファンタンはハイネの本書を、つぎのように手厳しく批判したのである。まず、本書はドイツの歴史の話ばかりで、肝心の現在について語るところがない。著者の哲学的見地はスピノザ風であり、その実体概念は、結局のところ絶対的平等に帰着するから、サン・シモン主義にとって重要な位階的編成と教会的な指導構造を許容しない。また、著者の汎神論は理論的にすぎる、もっと人民に開かれたものであるべきだ。さらに、『グロブ』で提案された仏・独・英の統合にかんして、ドイツにおける主導性はオーストリア

が担うべきであり、著者のドイツ観は批判的にすぎる。最後に、アンファンタンはハイネに、サン・シモンの『新キリスト教』を読むように求め、ハイネの革命主義的考え方を退けて改良を勧め、未来が要求するものは温和な支配者であり、それを実現するのは王と預言者との協同であると述べ、ハイネには預言者としてドイツで働き、サン・シモン主義の賛同者を獲得するよう希望する旨を表明したのである。<sup>(47)</sup>

そのドイツ、とくにプロイセンでは、すでに三〇年代の初めから、ハイネの名前で出たすべての作品が禁止されていたが、三五年の八月、プロイセン内務省がフランス語作品である『ドイツ論』をも国内での販売禁止にした。メターニヒは、かねて個人的にもハイネの作品を注視しており、三五年十月三十一日付のプロイセンの大臣ヴィットゲンシュタイン宛の手紙で、『ドイツ宗教・哲学史考』をふくむ『サロン第二巻』に注目するように促している。それは「ならず者たちの意図と願望のエッセンスをふくんでいるから」だが、「同時にこのハイネの作品は、文体と表現にかんしてまさしく傑作である。ハイネは共謀者たちの中の最大の頭目であり、かれに並びうる者はオコンネルか、ラマルティエーヌぐらいしかないだろう。問題の注目すべき点は、この作品が最初に世に出たのはバリの両世界評論においてであり、ドイツで公表される際にはプロテスタンティズムを攻撃している箇所はすべて省かれたということである。」このように危機感をあらわにしたメターニヒは、同じ大臣に宛てた別の手紙では、「青年文士連」はサン・シモン主義にもとづいて「神を創造」し、それを「宗派」としてひろめようとしている、と指摘して「サン・シモン崇拜」に注目し、「サン・シモンは、わたくしは個人的に知っているが、手のつけられないひねくれたばか者だった」と述べる。<sup>(48)</sup>この忠告にただちに呼応してプロイセンは、同年十一月に連邦構成国の先頭を切って「青年ドイツ派」の全面禁止を布告し、同年十二月には、連邦議会が「青年

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

ドイツ派」の作家の著作活動の禁止を決議して、その筆頭にハイネの名を挙げた。<sup>(49)</sup>

こうして、ドイツにおけるハイネの公的な活動は不可能になった。アンファンタンの希望は幻想となった。しかし、それ以前に、このような祖国の延長された絶対主義からの解放こそがハイネの願望であり、そのためには愛国者として戦っていたのであるから、ハイネにとっては自分が「預言者」となることや「王と協同」することなどは笑止の事態であつたであろう。アンファンタンの希望は、もともと幻想であつた。したがって、ヴィントフルも言うように、「精神のおよび社会的な状況の診断と治療法のどちらについても、双方の表明した内容から両者の違いがあまりにも明瞭になった。事実、両者の接触は三〇年代末以降はめだつて減少し、そのかわりにハイネの側からも批判的な発言がふえていった。<sup>(50)</sup>」しかしそのかに、ハイネへの連帯をあらわしたのは、たとえばピエル・ルルー(Pierre Leroux, 1797-1871)であつた。ルルーは、自由主義者からサン・シモンニアンになつたが、三一年十一月にバザールらがアンファンタン指導部から分裂したことをきっかけに、サン・シモン主義から離れ、独自の道を歩む。ドイツ哲学を神秘的・宗教的なものとみなす従来のフランスにおける(「スタール夫人の『ドイツ論』に代表される」)見方を、ハイネの『ドイツ論』によつて自分も初めて払拭されたのだと「六年前に」ルルーがハイネに「打ち明けた」旨を、ハイネが四二年六月二日の通信記事(「ルテーツィア」)に記している。<sup>(51)</sup>

## (二) ヴィクトル・クーザンとピエル・ルルー

一 アンファンタンを中心とするサン・シモン主義に対するハイネの評価が次第に低下したのとは逆に、ハイ

ネが評価を高めていった対象がクーザンである。クーザンは、ドイツ哲学のフランスへの導入者として知られていたから、ハイネも、かれのプラトンやテンネマン（『哲学史要綱』の翻訳、『哲学断片』（一八二六年、第二版は三三年）などに注目していたが、二人が初めて出会ったのは、三五年の夏、ベルジョジョソー公爵夫人のサロンにおいてである。それより半年前に、ハイネは『ドイツ宗教・哲学史考』の末尾近くで、ヘーゲル以後のドイツの自然哲学の複雑な陰影を強調し、「君たちフランス人がもし四年前にドイツの自然哲学に精通していたら、あの七月革命はけっしてなしえなかっただろう」と述べる。「革命をやるには思想と力との集中、気高い偏狭、そしてフランスの従来の学派のみが許容するよううぬぼれた軽率が必要である。」「あのころ君たちにドイツ哲学を教えようとしたあの偉大な折衷主義者も、じつのところドイツ哲学を少しも理解していなかったことは、世界的に重要なことだとわたくしは思う。神意の命じたかれの無知は、フランスにとっても全人類にとっても有益だったのである」と。つまり、実際の「ドイツの自然哲学」は、偉大な「むかしのシェリング氏」も、心身の衰えとともに、かつての汎神論からカトリックへ改宗して没落してしまっただけでなく、反動的な「アダム・ミュラー」や中世賛美の「ゲレス氏」のような「きわめて有害な雑草」も生み出していたのだから、とも言う。<sup>(52)</sup>クーザンに対するハイネらしい痛烈な皮肉である。

さらに、『ロマン派』の第二巻のなかでは、「これまでドイツ哲学という名のもとに、とくにヴィクトル・クーザン氏がフランス人に紹介してきたものは、ドイツ哲学などではない。クーザン氏は非常に多くの、気がきいてはいるがくだらないことをしゃべっている、しかしドイツ哲学を講義したことはないのだ。」<sup>(53)</sup>また、『ロマン派』にはクーザンの「偉大さ」を「称揚する」内容の補遺が付けられている。これはもとは、ヘーゲル派のヒンリヒ

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

ス（Hermann Friedrich Wilhelm Hinrichs, 1794-1861）によるクーザンへの書評（ベルリンの『科学批評年誌』掲載）のための導入文として執筆されたものである。そこでは、ハイネはクーザンを、一般には哲学者は浮世を捨てねばならぬと信じられてきたにもかかわらず、「不滅の哲学者であると同時に、終身のフランス貴族院議員になりうることを示した」人物として、ヘラクレス、ナポレオン、アレクサンドロス、フリードリヒ大王らに並べてあからさまに称揚しつつ、その陰に、いたるところに辛らつなとげを見え隠れさせている。「自分はシェリング氏やヘーゲル氏からいろいろ借用した、とわれわれに説得しようとすることで、かれはみずからを誹謗している」が、「この誠実な男はシェリング氏とヘーゲル氏の哲学から何一つ盗んでいない。かれが思い出として両者から何かをもち帰ったとすれば、それはただの友情の印でしかない。」ドイツ人にも難しいカントを「直感的に」理解できるかれの「天才」ぶりは、「フランス人の頭脳」が、鏡ばかりで内装しているフランスの「喫茶店と同様」、「どんなに狭くどんなに貧弱な頭脳でもきわめて広く、輝いて見える」のではないかとドイツ人の目をまどわせるようなものだ。ハイネはこんな調子でつづけ、「崇高から滑稽へは時にただの一またぎだ」と言うだろう「ヴォルテール主義者ども」が、世界的な「クーザン氏の名声は世界旅行に出ており、フランスからはすでに旅立ってしまった」と無礼にも嘲笑する声がきこえる、と述べて補遺の筆をおくのである。<sup>(54)</sup>

二 しかし四〇年以降は、こうしたハイネの皮肉に満ちた対抗心は弱まり、むしろ左右両翼から攻撃されているクーザンを、思想と学問の自由のために闘っている人物として評価し、擁護するようになる。『ルーツィア』という作品は、ハイネが四〇年二月から四三年六月（補遺を除く）にかけて『アウクスブルク一般新聞』に寄稿した、フランスの「政治、芸術および民衆生活についての通信」の集成（一八五四年刊）であるが、そのな

かの四一年五月十九日付の通信では、その四日前の土曜日の午後に開催された、上述の「道德・政治科学アカデミー」の会議における会長クーザンの開会演説に言及し、「かれは、われわれがつねにかれの功績として認めるであろう自由の意識をほとばしらせた」と述べる。「その男を、われわれは以前には、特別に好ましいと思つていたわけではないが、かれは、最近はわれわれに、本当の好意というわけではないにしても、以前よりもつと承認する気持ちを抱かせるようになった」。「気の毒なクーザンよ、われわれは君を以前には非常に冷たくあしらつたが、君はつねにわれわれドイツ人に対してとても愛情深く友好的だつた。とくに、ドイツ学派の忠実な弟子であり、ヘーゲルの友である、わがヴィクトル・クーザンが、フランスでは大臣であつたまさにそのとき、ドイツではフランス人に対して突然あのみさかいのない憤まんがわきおこつたのだ。それは、いまは次第におさまつており、もしかしたらそのうち想像もつかなくなるかもしれない。あるとき、昨年の秋、わたくしはイタリア大通りでクーザン氏に出会つたことを覚えてゐる。そのときかれは、そのある銅版画店の前にたたずみ、そこに展示されていた〔フリードリヒ・〕オーヴァーベックの版画をながめて賛嘆した。世界はがたがたになつており、ベイルートの砲声が警鐘のように東洋と西洋のあらゆる戦意を呼びおこし、エジプトのピラミッドを震わせ、ライン河のこちらと向こうとでサーベルを研いでいた。―そして、そのときのフランスの大臣ヴィクトル・クーザンは、イタリア大通りの絵画店の前で静かにたたずみ、オーヴァーベックの静謐で敬虔な聖人画を賛嘆し、そしてドイツの芸術と学問のすばらしさについて、われわれ〔ドイツ人〕の心情と深い思慮について、われわれの正義愛と人間性について夢中になつて語つた。へしかし、勘弁してほしいよ、とかれは突然、夢から覚めたかのように話を中断して、ヘドイツでいまあなたらが突然われわれに対してわめき騒いでゐる憤激は、いった

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

いどういうことなのだろうか。～かれは、この憤怒を理解することができず、わたくしもそれについて何もわからなかった。そして、われわれは腕を組んで大通りをぶらつきながら、あの敵意の究極原因について大声であれこれ推論を重ね尽くしたところで、パサージュ・デ・パノラマまで来た。そこでクーザンは、マルキ Marguis でチョコレートを一ポンド買うからと、わたくしと別れた。<sup>(55)</sup>」

また、ハイネは、フランスの政治家たちがドイツについて「共感」を抱いていることのあらわれとして、ギゾーの「ものの考え方はわれわれの考え方と似通っており、かれはドイツの民衆の必要と良い法とを根本からよく理解している」ことを指摘する。さらに、「イマヌエル・カントには純粹理性の最良の批判があり、マルキには最良のチョコレートがあることがよくわかっていたヴィクトル・クーザンのような人物とならんで、当時の閣僚には、同様にドイツの守護神「ゲート」を信奉し、特別の研究をそれに捧げたフォン「ド」・レミュザ v. Remusat 氏もいた。<sup>(56)</sup>」イタリア大通りでのクーザンとの邂逅と散策は、ハイネのクーザンへの理解を格段に深めたようである。

さらに、『ルーツィア』に付された「共産主義、哲学および聖職者」と題された補遺のなかの、四三年六月十五日付の通信文では、ピエル・ルルーによる攻撃からクーザンをはつきりと擁護している。そこでの記述にしたがえば、ハイネは、「十一年前にテトブー館 Salle-Tatbout で、サン・シモン主義の主教の一人として」のルルーと知り合ったが、ルルーはまもなく「新道德の教義に反抗して〔……〕仲間と訣別した最初の人」となり、『百科評論 Revue encyclopédique』の活動を展開したが、そこではルルーはクーザンの「折衷主義」を執拗に論難の標的にしてきた。しかしそれは誤った性急な「中傷」であり、その「不正と偏狭さ」は、かつてわれわれがへー



ゲルに対して、「その学説はきわめてリベラルであつたにもかかわらず」、その「陰気な」表現形式のゆえに旧勢力がかれの同盟者になつたとおろかにも誤解して「ヘーゲルを責めるのに急だつた」と似ている。しかしクーザンのばあいには、かれを攻撃しているのは、ルルーを先頭に立てた「最左翼」だけでなく、「最右翼」つまり「ローマン・カトリック・アポストル派の坊主たち」も加わっている。かれらはあの「プロイセンのプロテスタントの坊主たちよりもはるかに聡明」で、「この敵がかれらをソルボンヌから追つぱらつたことを知っていた。」こうして「クーザン是对立した二つの方向から攻撃されている。そして十字の旗をひるがえす全信仰軍がシャルトルの大神教の指揮のもとに、かれをめざして進軍しているとき、一方、思想のサンキュロットたちも、勇敢な心臓や、貧弱な頭脳どもも、ピエル・ルルーを先頭にしてくれに襲いかかっている。この戦闘では、いっさいのわれわれの勝利の願いはクーザンに向けられている。なぜなら、たとえ大学の特権がその弊害をもっているにしても、やはりそれは、つねに無慈悲な残酷さで科学と進歩の人々を迫害したあの人たちの手中にすべての教育が帰するのを防ぐからである。そしてクーザンがソルボンヌにいるかぎりには、少なくともそこでは、以前のように火あぶりの刑が最後の論証として、ultima ratioとして、日常の論争のさいに採用されるようなことはないからである。そうなのだ、かれはそこに思想の自由の旗手としてふみとどまっているのだ、そしてその旗は、ソルボンヌのかつてあんなにも鼻持ちのならなかった蒙昧主義者どもの巢の上にひるがえっているのだ。」<sup>(57)</sup>

「そしてヴィクトル・クーザンは、言葉のまつたきドイツの意味における哲学者である。ピエル・ルルーは、哲学をむしろ社会的諸問題についての一般的研究と解するフランス人の意味においてのみ、そうなのだ。実際、ヴィクトル・クーザンは、人類の欲求よりもむしろ人間精神をより多く探究するドイツ的な哲学者であり、そし

で大切な自我についての考究のために、ある種のエゴイズムにおちいった。思想それ自体に対する愛着が、かれのばあい、あらゆる精神力をすっかり奪ってしまう、しかし思想そのものは、かれにとつてはまず美しい形式のゆえに興味がある、そして形而上学においては、かれをたのしませるのは結局のところ弁証法だけである。プラトンの翻訳者については、月並みな言葉を裏返しにするが、かれは真理よりもプラトンを愛しているのだと、いちおう言えるだろう。この点ではクーザンはドイツの哲学者たちとは異なっている。つまり、後者にとつてと同様、かれにとつても思惟が思惟の究極目的なのだが、かれのばあいは、このような哲学的無目的性に、なおある種の曲芸師的な無関心主義が加わっている。だから、ピエル・ルルーのような人、つまり、思想の友であるよりもむしろはるかに人間の友であり、その思想はすべて一つの根底的な思想すなわち人類の利害をもち、そして生来の聖像破壊主義者として、形式に対する芸術的な喜びになんらのセンスももたないルルーのような人にとつては、この男はどんなにいとわしいことだろう！ このような精神的相異のなかに、憎悪の原因は十分ある。それゆえ、クーザンに対するルルーの敵意を、個人的動機から、日常生活のくだらない出来事から説明する必要はない。<sup>(58)</sup>」

三 このようにハイネはクーザンを、「人間精神」を探究する「ドイツ的な哲学者」として評価しなおし、その一方に「人類の利害」・「人類の解放」に徹するルルーを対置する。——「いや、ヴィクトル・クーザンに対するピエル・ルルーの激烈な憤怒は、ベルゼルケル的な憤激は、この兩人の精神的相異の所産なのである。必然的に互いに反発しあう性格というものがあつたものだ。〔……〕クーザンの折衷説は、スコットランドの粗野な経験論と、ドイツの抽象的な理想性とのあいだの細い針金のつり橋である。〔……〕ルルーは、もつと高い、だがも

つとはるかに非実的な様式での大神官長であり、かれは巨大な橋をつくろうとする。〔……〕現在までのところ、ルルーの独自の体系については、なにもはっきりしたことは言えない。現在までのところ、かれはただ材料だけを、ばらばらの石材だけを提供しているにすぎない。それに、かれにはまったく方法が欠けている。それはフランス人に固有の欠陥だ。わずかな例外があるが、そのなかでとくにシャルル・ド・レミューザが挙げられねばならない。〔……〕ルルーはたんに理念だけをもっている。この点で、かれにはヨーゼフ・シェリングとのある種の類似性があることはいなめないのだが、ただ、かれの理念はすべて人類の解放という救済にかかわっており、かれは古い宗教を哲学で繕うのではけつてなくて、むしろ哲学に新しい宗教の装いを与えている。ドイツの哲学者のなかでは、ルルーと最も親近性があるのはクラウゼである。かれの神も、同様に非現世的なものではない。その神は、この世の住人であるのだが、やはりそれにとってもふさわしいある種の人格をもっている。ルルーは、あきもせずに魂の不滅、*immortalité de l'âme*をたえず囁んでいるが、これは、古くからある完成能力説 *Perfektheitslehre* の完成された反芻にはかならない。<sup>(59)</sup>」

右のクラウゼへの言及についていえば、ハイネは、アーレンスだけでなくクラウゼとも個人的に接触していた可能性が高い。弁護士をめざしたハイネは、一八二〇年の秋、ボン大学から転じてゲッティンゲン大学に入るが、年末の決闘騒ぎで翌年早々に放校処分を受け、今度はベルリン大学へ転じてヘーゲルの講義を聴いた。そのご、詩作や評論をつづけ、パリをあこがれつつ、二三年五月、ベルリン大学を中退し、翌年初めにゲッティンゲン大学に再入学、翌二五年夏、同大学を卒業した。そのかん、クラウゼは、二三―二四年の冬学期から同大学の私講師として講義を始めており、貧窮のなかで多子家族を養うために「毎週三十二時間」(二四―二五年の冬学期)<sup>(60)</sup>

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

の講義で心身を酷使するような生活を、その三一年にゲッティンゲンを追われてミュンヘンへ移るまで、つづけるをえなかった。

学生ハイネは、ゲッティンゲン大学に再入学した二四年の秋に、ハルツ地方を旅行して『ハルツ紀行』を一気に書き上げるが、この作品は、この大学町への嘲弄と皮肉で満ちていることで知られている。「一般にゲッティンゲンの住民は学生と教授と俗物と家畜とに分類されるが、この四つの階級の区別はけっして厳密なものではない。」ハイネがこういう調子で、「学問深遠なゲオルギア・アウグスタ〔大学〕の偏狭で無味乾燥な知識蒐集癖」を揶揄したのは、自分に放校を喰らわせたからというだけではなかったであろう。しかし、作品の終末部では、歴史学・政治学（官房学）の教授——アダム・スミスのドイツへの導入者の一人としても知られる——ゲオルク・ザルトリウス（Georg Sartorius von Waltershausen, 1765-1828）の学問と人柄への深い敬意を表明している。そして、右の「知識蒐集癖」につづく段落では、「結構な手当を受けている大学の守衛たち」は、「学生がボーフデンで決闘をしないように、また、ゲッティンゲンに入る前には今でもなお数十年間検疫を受けなければならない新思想が、投機的な〔思索する〕spekulierend 私講師によって密輸入されないように、油断なく見張っていないならならぬのである」とある。<sup>(61)</sup>皮肉を込めて描かれた当時の大学のこのような非常に保守的な雰囲気の中から、この「投機的な〔思索する〕私講師」としてハイネの念頭に置かれていたのはクラウゼに相違ないという解釈が、現在のハイネ研究とクラウゼ研究の双方に存在している。<sup>(62)</sup>

四三年六月の『ルテツィア』に戻れば、さらにつづけて、ハイネの観察眼は、ルルーを通してフランスの貧困問題に及ぶ。「ルルーは民衆の子であり、青年時代は印刷工だった。そしてこんにちでもなお、その風貌にプ

ロレタリアートのなごりをとどめている。「……」かれはたんに考える哲学者であるだけでなく、感じる哲学者でもある。そしてかれの全生活と全努力は、下層階級の道徳的・物質的狀態の改善に捧げられている。「わたくしはいま軽率にも、かれの貧乏なことをもらしてしまった。「……」——そうなのだ、ピエル・ルルーは貧しい。サン・シモンやフリーエがそうであったように。そしてこれらの偉大な社会主義者の運命的な貧しさこそが、世界を富ませた、つまり、われわれに喜びと幸福の新しい世界をひらく思想の宝をもつて富ませたものにほかならない。どんなに恐るべき貧困のなかにサン・シモンがその晩年を送ったかは、一般に知れわたっている。「……」フリーエも友人たちのお情けにたよらねばならなかった。そして色のはげた、すりきれた服を着たかれが、上着の両ポケットをいっばいに詰め、一方のポケットからはびんの頸を、他方からは細長いパンをのぞかせて、パレ・ロワイヤルの柱に沿っていそがしげに歩いていくのを、わたくしは何度見かけたことだろう。「……」フランスでは貧困は、フランスにおける偉大な人類救済者たちの、救済する思想家たちの運命である。「……」フランスでは「産業主義の金もうけ欲がどんなに猛烈にはびこつていようと、すぐれた人間の貧困はやはり真の名譽称号である。富は不名譽な疑惑を生む（……）」。「なるほど金持ち礼賛は、他の国と同じようにフランスでも一般的である。だが、それは神聖な尊敬をとまなわない礼賛である。」それは「フランス人のおう揚な性格から、またかれらの歴史から説明できる。」旧制度、共和政、帝政時代、復古王政をへて、「七月」後は「市民王ルイ・フィリップが王位にのぼった。かれ、黄金の代表者が、その黄金が、いま支配しているが、敗北した過去の党と、いはいくわされた未来の党とから、世論のなかで同時に攻撃されている。」両者は「互いに競つて、金力をほこる成り上がり者どもを嘲笑している。」「年老いた共和主義者」と「ボナパルティスト」も、「この侮辱的な調子の

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

点では一致している。<sup>(63)</sup>「……」——こうした時代状況のなかで、まもなく同じ四三年の十月末からマルクス夫妻がパリに住み、四五年二月初めにパリを追われてブリュッセルへ移るまでハイネと交流する。

こうしてみれば、ハイネは、一方でサン・シモン主義者たちと交流を重ねながら、その教説自体からはつねに一定の距離をおき、他方では、「人間の欲求よりもむしろ人間精神」を探究する「ドイツ的な哲学者」としてのクーザン、しかも「思想それ自体に対する愛着」・「形式に対する芸術的な喜び」に生きるクーザンへの共感を隠さなかったという点が、われわれの注意をひくであろう。ルルーはすでにサン・シモニアンではなかったが、ハイネは、「人類の利害」を思想の根底にもつ「最左翼」としてのルルーに「生来の聖像破壊主義者」をまとめ、「形式に対する芸術的な喜び」になんらのセンスももたない「この人物の側に立とうとはしなかった。それは、「政治革命」と「社会問題」とを注視する「ロマン派」詩人の魂が動き出した直感的な好悪と選択によるものだったと言ふべきであろう。

四 この詩人の選択は、いわば時代の主題として出現した「共産主義」に対するハイネの心情におけるアンビヴァレンツとして再現される。死の前年、一八五五年三月に書いた、『ルテーツィア』フランス語版への「序文」をみよう。——わたくしが『アウクスブルク一般新聞』に「共産主義者たち」について記事を書いたことによつて、「共産主義者たちは、〔……〕かれらが実際に存在することを知った。」「共産主義者たちの分散した諸団体は、かれらの大義の不断の進歩についての、最初の信憑するにたる報道を得たのである。」「未来は共産主義者たちのものであるというこの告白を、わたくしはこのうえない恐怖と不安の調子でおこなった。〔……〕じつさい、これらの聖像破壊主義者たちが支配権に到達するときを考えると、わたくしはただただ恐怖と絶望におそ

われる。そのまめだらけの手で、かれらはわたくしの心にとつてあんなに高価な美の大理石像を、情け容赦もなく破壊するだろう。〔……〕かれらはわたくしの月桂樹の林を切り倒し、そこに馬鈴薯を植えるだろう。〔……〕そして、ああ！ わたくしの歌の本は、香料品屋が未来の老婆たちのために、コーヒーか嗅ぎ煙草をいれてやる紙袋をつくるのに使われるだろう。ああ！ わたくしはそれらすべてを予見する、そして勝ちほこるプロレタリアートが、わたくしの詩はすべての古いロマンチックな世界もろとも消え去るだろうと破壊をおどかすのを思うとき、わたくしは言語に絶する哀愁にとらわれる。だがそれにもかかわらず、わたくしは率直に告白する、わたくしのすべての利益と趣味にそんなに反するその同じ共產主義が、打ちかつことができぬほどわたくしの心を魅了するのだと。わたくしの胸のなかで二つの声がそのために語る、なんとしても黙らせることのできぬ、おそらく結局は悪魔のささやきにすぎぬ二つの声が。」

「これらの声の第一のものは、論理のそれである。悪魔は論理家である！とダンテは言った。〔……〕へ人間はすべて食う権利をもつ」という前提をわたくしが論破しえないならば、当然わたくしはまたそのあらゆる結論をも承認しなければならなくなる。〔……〕利己主義が榮え、人間が人間に搾取されるこの古い世界、そんなものはたたきこわれるがいい！ 〔……〕香料品屋に祝福あれ、——たとえ世界はほろぶとも、正義はおこなわれよ *fat justitia, percat mundus*——」

「わたくしをからめとる二つの命令する声の第二のものは、〔……〕憎悪の声である。〔……〕われわれの共同の敵である党派に対してわたくしが抱く憎悪の声。わたくしが言うのは、ドイツにおける国粹 *la nationalité* の代表者と自称する党、その祖国愛なるものはただ外国人や隣国に対する愚かしい嫌悪にはかならず、そして毎日、

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

とくにフランスに対してその憎悪をそそぎかける、あのえせ愛国者たちのことである。〔……〕一八一五年のドイツ狂ども *teuomanes* の生き残りとか孫子ども——わたくしはわたくしの全生涯をつうじてかれらを憎み、かれらとたたかった、そしていま、死んでゆくわたくしの手から剣がはなれ落ちようとするいま、かれらを第一の邪魔者とみなす共産主義が、かれらに止めを刺すであろうという確信によって、わたくしは慰めを感じる。〔……〕国粋主義の連中に対する憎悪から、わたくしはほとんど共産主義者たちにはれこみかねぬほどだ。〔……〕共産主義者たちは無神論者でさえある〔……〕。だがその主要信条として、かれらは絶対的なコスモポリタニズムと、あらゆる国の人々に普遍的な愛と、あらゆる人間、この地上の自由な市民に対する平等な友情とを信奉している。この根本的信条は、かつて福音書が説いたものと同一のものである。<sup>(64)</sup>」

このように、人間を搾取する社会を打破する「論理」と国粋主義への「憎悪」という二つのあらがいがたい声に動かされて、たしかにハイネは共産主義に「魅了」されている。しかし同時に、それでもなお、かれら「聖像破壊主義者たち」の支配する無味乾燥な社会の到来に「恐怖と絶望」を抱かざるをえないハイネがいる。それはコスモポリタンなドイツ人の眼であり、なによりもロマン主義的詩人の心情である。そして、サン・シモン主義が詩人の心をとらえたのも、すでにサン・シモンその人における産業と技術と芸術との不可分な一体性に表されていたもの、つまり、フランス革命後のすぐれて脱政治的な、経済的・社会関係問題的な新時代を現に弟子たちがおのおの分業して多面的に模索した過渡期の多義的な思想複合体というその性質のゆえであつたのではないだろうか。<sup>(65)</sup>

ハイネがサン・シモン主義から学んだものは、たとえばバザール、アンファンタンら弟子たちの共同講演記録



『教理解説』（第一年度）にある「人間による人間の搾取」に表現されているような社会分析の視角であり、その基盤をなしていた（現代の「プロレタリアという階級」は奴隷制の「延長でしかない」という論点もふくむ）歴史理論であって、この点を、ミヒヤエル・ヴェルナーは、ハイネにとつて重要であったのはサン・シモン主義の提起した「分析や解決案の細部ではなく、大きな動向」、普遍的な展望であり、かれはこの展望が、サン・シモン主義の教理において、生のすべての領域を包括する一つの精神的な総合として機能しているとみたのだ<sup>(66)</sup>、と言いついてはいる。サン・シモン主義がハイネの心をとらえたのは、そのような「普遍主義的な特徴」であり、それがハイネの関心を「政治的な過程」「革命のトラウマ」から社会的な過程へ<sup>(67)</sup>深化させるきっかけを与えたと考えられる。J・S・ミルが体験した「歴史」への開眼も、それに重なりあうだろう。

### （三） ルイ・ブラン

一 ヴェルナーが、ハイネへの影響という点でピエル・ルルーと並んで注目しているのは、ルイ・ブラン（Louis Blanc, 1811-1882）である。『ルテーツィア』では四〇年十一月六日付となっている記事（実際には四二年一月十二日作成と推定されている）にしたがえば、ハイネは「すでに六年前に、かれ『ルイ・ブラン』とは『Le Monde』とこう名前の共和派の雑誌の編集者としてここ『パリ』で会つて<sup>(67)</sup>きた。その『ブラン』が『Le Bon Sens』（一八三六―三八年）を経て『Revue du Progrès』（一八三九―四二年）の編集者になってからも交流があり、四二年一月のハイネの手稿によれば、『労働の組織』（一八三九年、まず同誌上で公表、ついで小冊子化）で自由競争原理の克服を説いた著者としてだけでなく七月王政『十年史』（第一巻は一八四一年刊、四四年までに

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

全五巻）を書いた現代史家としても、ブランを「フランスの最も偉大な思想家の一人」と高く評価し、「顕著な将来性」を見込んでいた。<sup>(68)</sup>

同時代人（Vanhagen）の記録によれば、それより前、ルイ・ブランが『労働の組織』の印刷を準備していた四〇年の春に、ハイネは鉄道の駅でかれに出会ったとき、「いまやフランスを最大限ギリシヤに送ることができ人になられて、心からお祝い申し上げます」と声をかけたという。<sup>(69)</sup>同年四月末にもハイネはつぎのような記事メモを残している。「共和派の最も重要な機関紙は、*Revue du Progrès*である。編集長であるルイ・ブランは、明らかにかれの党派の最も傑出した頭である。かれの体格は非常に小柄で、見た目はほとんど学校の生徒のようで、小さい赤い頬をして、ひげもほとんど皆無だ。しかし精神的にはかれは党派仲間のすべてにたちまさっている。そしてかれの視線は、社会問題が巢くい待ち伏せている奈落の底にまで深く達している。かれは偉大な将来をもっている男だ。なぜなら、かれは過去を理解しているからだ。かれは、上述のように、かれの党派の最も傑出した頭である。そしてわたくしは、今週、かれと共和派の共同編集者たちとのあいだで起こった意見対立について知ったとき、たいして不審に思わなかった。つまりルイ・ブランは、バルザックの『戯曲』『ヴォートラン』が問題になった折に、劇場検閲はどうしても必要だとあからさまに公言していたからである。そんなざつとするような発言、反ジャコバン主義的な異端表明に憤慨して、フェリックス・ピエ *Felix Pyat* とオギュスト・リュシエ *Auguste Luchet* は *Revue du Progrès* の編集部から離脱した。両名は、立派な人格者であるだけでなく、きわめて才能豊かな著述家でもあり、二・三年前にかれらは共同で戯曲を書いたが、それは劇場検閲によって差し止められたのだ。<sup>(70)</sup>」ルイ・ブランは、個人の表現の自由よりも国家の立場を優先させたのである。

ルイ・ブランの『十年史』の公刊をうけて執筆された上述の四二年一月十二日作成と推定されている記事でも、「まだせいぜい三十歳を多少こえたくらい若い」かれの小軀童顔の外貌と老成した論理との不釣り合い、本人はマドリッド生まれで母親はコルシカ出身であることを紹介し、「精神の点では、ルイ・ブランはなによりもジャン・ジャック・ルソーと親和的で、ルソーの著作がかれの思考と著述の様式全体の出発点になっている」と述べ、かれの『労働の組織』を評してつぎのように指摘する。「知識は完璧ではないものの、民衆の苦悩に対する熱い共感が、この小品のどの行からも読み取れる。そして、同時にそこには、無制限の支配への偏愛、独創的な人格主義に対する徹底的な反感がはつきり示されており、この点でルイ・ブランは、たとえば才気に満ちたピアのような、何人かのかれの共和主義的仲間たちと際だって区別される。この差異は、少し前に、つまり、あの共和主義者たちが要求している絶対的な出版の自由をルイ・ブランが認めようとしなかったときに、ほとんど衝突をひきおこした。このときまったく明白になったのは、つぎの点である。すなわち、あの共和主義者たちは自由を、ただ自由のために愛するが、ルイ・ブランは自由を、むしろ博愛主義的な諸目的を促進するための手段とみなしていること、したがってこうした見地から、かれにとっては、諸個人の能力や偉大さのいっさいの権限や根拠よりも、どんな政府もそれなしでは民衆の安寧を促進することができない統治の権威というもののほうが、はるかに重要であるということ、これである。」<sup>(1)</sup>これにつづけて、ハイネは皮肉まじりに、つぎのように述べる。「そうなのだ、もしかしたらかれは自分の体格のゆえに、背の高い人間はみな嫌いなかもしれない。そしてかれは、ルソーのもうひとり弟子である、いまはなきマクシミリアン・ロベスピエールとかれが共有する不信の念をもって、「大きな」かれらをねたましげに見ているのかもしれない。わたくしは思うのだが、あのこび

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

とは、定められた新兵基準より背が高い頭はどれもみな切り落とさせたいと願っていて、それはもちろん公共の安寧、普遍的な平等、民衆の社会的な幸福のためなのだ。かれ自身は節度があり、自分の小さな身体になんの喜びも感じていないようにみえる。それゆえにかかれは、国家に普遍的な台所の平等を導入しようとする。そこでは、われわれ全員のために同じスパルタ風の黒いスープがつくられ、さらにもっとひどいことだが、そこでは巨人も、こびとの兄弟が享受するのと同じ分量を与えられるのだ。こんな新しいリクルゴスは、まっぴらごめんだ！ われわれはみな兄弟であるというのは、その通りだが、わたくしは大きな兄弟であり、諸君は小さな兄弟たちである、そこでわたくしにはより多くの分け前がふさわしい。ルイ・ブランというのは、リリパット人とスパルタ人とのおかしい複合語なのだ。いずれにせよ、わたくしはかれには大きな将来があると思っており、かれは、たとえ短くても、ある役割を演じることだろう。<sup>(72)</sup>」

「諸個人の能力」や「出版の自由」よりも、「公共の安寧」や「普遍的な平等」を実現するための「統治の權威」を重視するルイ・ブランに対して、ハイネは距離をおいて批判的にながめている。「普遍的な台所の平等」をうたう「新しいリクルゴス」は、いわばプロクルステスのベッドだと言うのである。後段の「わたくしにはより多くの分け前がふさわしい」というのは、ハイネ流のブラック・ユーモアかもしれないが、ハイネ自身も、上述のように人間による人間の「搾取」を克服する「社会主義」あるいは「共産主義」への期待を抱いているから、諸個人の自由と社会的秩序との深刻なディレンマを自覚しているかぎりでは、ルイ・ブランをただ批判すればすむというわけでもなかった。<sup>(73)</sup>

二 一八四〇年代にはいれば、同時代の観察者としてローレンツ・シュタイン (Lorenz Stein, 1815-1890) が加

わる。かれは七月にデンマーク民事訴訟の研究でキール大学から法学博士の学位を取得し、翌四一年にデンマーク政府の留学資金を得て同年十月から四三年三月までパリに滞在した。そのかんシュタインは、「国家」とは異なる「社会 *society*」の概念をフランスで発見し、「政治運動」とは異なる「社会運動」の時代の到来を確信する。

かつてのイエーナのブルシェンシャフトの闘士アルノルト・ルーゲの紹介を仰いでライプツィヒ（ヴィーガンツ社）で四二年九月に公刊した『こんにちのフランスにおける社会主義と共産主義』は、それらの運動の全体像をドイツに紹介した先駆的事例となる。ここでは、「社会主義」としてサン・シモンとサン・シモン主義者、フリーエとフリーエ主義者を配し、それと「並列する」独自の思想家として、ラムネ、ピエル・ルルー、ブルードン、ルイ・ブランの四人に注目し、「共産主義」としては、バブーフ（およびブオナロッティ）を中心にカベにも言及している。シュタインが本書の四二年六月付の序文で、とくに名をあげてその好意に謝意を呈したのは、ヴィクトル・コンシデラン（フリーエ派）、ルイ・レボー、ルイ・ブラン、カベの四人であり、シュタインはとくにレボーの著書『現代の改革家あるいは近代社会主義者サン・シモン、シャルル・フリーエ、ロバート・オーウェンについての研究』（一八四〇年、パリ）を全面的に活用している。<sup>(74)</sup>

シュタインは、こうした表の顔とは別に、パリのドイツ人亡命者の活動やフランス社会主義の動向についてプロイセン内務省宛に報告書を書いていたという裏の顔ももつ。シュタインの視野の端にアーレンスが登場するのは、フランスで劣勢に立たされたイエズス会のカトリシズムがベルギーに進出しようとしている状況にふれた、四二年五月十九日付のプロイセン参事官フランツ・フーゴ・ヘッセ宛の報告書においてである。「精神的にベルギーは、一部はフランスに吸収され、一部は、最近とくにブリュッセル大学内の対立とアーレンス教授によるド

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

（75）  
イツ哲学の登場の成功が示しているように、ドイツの宗教的反対派によって覚醒させられている」と。ベルギーでは、この時期に、レーヴェンのカトリック大学とブリュッセルの自由大学との対立を背景として、ブリュッセルでも宗派対立が激化しており、アーレンスはその渦中にあった。テュービンゲンのモールは、一八三九年秋のベルギー旅行の際にアーレンスを訪ねて懇意となり、以後数年にわたって両者は手紙のやりとりをおこなっているが、モールはベルギーの大学問題に関心を寄せ、アーレンスは、ブリュッセルにおけるカトリック側からの攻撃とそれへの対応に追われているさまを、一八四〇—四四年のモール宛の手紙にくりかえし記している。

- （1） 以上については、木村周市朗「アーレンスの所有権論と共同性」、『成城大学経済研究』、第二二二号、二〇一六年三月、所収、を参照のこと。アーレンスのモール宛の手紙については、同「十九世紀ドイツの自然法論とへ社会」の発見」、同上誌、第一九九号、二〇一三年、所収、を見よ。

- （2） J. S. Mill, *Autobiography*, in: *Collected Works of John Stuart Mill*, vol. I, *Autobiography and Literary Essays*, ed. by J. M. Robson and J. Stilling, University of Toronto Press, 1981, pp. 171, 173, 175, 177. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』、岩波文庫、一九六〇年、一四六、一四八—一四九、一五二ページ。（傍点部分は、原文がイタリックである。）なお、本稿では、引用文中の（ ）はすべて原文のまま、〔 〕の部分は引用者による補筆であり、へ は引用文中の引用符である。引用文中の傍点は、とくに断らないかぎり原文がゲシュペルトであることを示す。邦訳書があるものは当該ページ数を注記するが、本稿での引用文は邦訳書に従っていないばあいがある。

- （3） H. Ahrens, *Die Abwege in der neuem deutschen Geistesentwicklung und die notwendige Reform des Unterrichtswesens*, in: *Die neue Zeit, Freie Hefte für vereinte Höherbildung der Wissenschaft und des Lebens, den Gebildeten aller Stände*

- gewidmet, Im Geiste des Philosophencongresses unter Mitwirkung von Gesinnungsgenossen hrsg. von H. Frhr. von Leonhardi, VII. Heft, Prag 1873, S. 81-184, hier S. 158f. Anm.
- (4) H. Ahrens, Cours de psychologie, fait à Paris sous les auspices du gouvernement, Premier volume, Contenant l'Anthropologie générale, Paris, Metklein, 1836, pp. v-vi.
- (5) H. Ahrens, op. cit., Second volume, Contenant la psychologie proprement dite et la partie générale de la métaphysique, Paris, Brockhaus, 1838, pp. VI-VII.
- (6) Ibid., p. VIII.
- (7) ただし第二巻は、第一巻とは出版者が異なっており、第二巻には、第一巻と同型の扉の前に、COURS DE PHILOSOPHIE. とだけ印刷されたもう一枚の扉が付けられている。まもなくアーレンスの主著（初版一八三八年）がスペイン語、イタリア語をはじめ多言語に翻訳される過程で、著者の関知しない異本も出回ったとアーレンスは述べているが、とくに本書の出版経緯については不明な点が残されている。
- (8) クーザンについては、まずは以下を参照のこと。松永澄夫「19世紀総論」、同「クザン、ヴィクトール」、村松正隆「ロワイエールコラール」、小林道夫・小林康夫・坂部恵・松永澄夫編『フランス哲学・思想事典』、弘文堂、一九九九年、所収、川口茂雄「一九世紀フランス哲学の潮流」、杉山直輝「スコットランド哲学のフランスへの流入」、伊藤邦武編『哲学の歴史 8 社会の哲学』、中央公論新社、二〇〇七年、所収、村松正隆「国家・教育・哲学の三位一体——ヴィクトール・クザンの哲学をめぐって——」、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』、第五号、二〇〇〇年、所収。
- (9) D. S. Goldstein, "Official Philosophies" in Modern France, The Example of Victor Cousin, in: Journal of Social History, vol. 1, No. 3, Oxford University Press, 1968, pp. 259-279, particularly pp. 265-266.
- サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

- (10) M. Klüver, *Sozialkritik und Sozialreform bei Heinrich Ahrens*, Diss., Hamburg 1967, S. 11 Anm.
- (11) E. M. Urena, K. C. F. Krause, *Philosoph, Freimaurer, Weltbürger, Eine Biographie*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1991, S. 620.
- (12) *Unsere Zeit*, Deutsche Revue der Gegenwart, Neue Folge, 11. Jg., 2. Hälfte, Leipzig 1875, S. 948ff. レオンハルディは「一八三四年以降、クラウゼの遺稿集を『宗教哲学』・『認識論』・『生の理論および歴史哲学』の主題別に連続出版するとともに、フリードリヒ・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) とその仲間ランゲタール (Heinrich Langenthal, 1792-1879) と交流し、のちのクラウゼ派とフレーベル派との合流の素地をつくった。レオンハルディは四一年にクラウゼの次女ジドニー Sidonie と結婚してのち、同門のレーダー (Karl David August Roder, 1806-1879) のいたハイデルベルクで、私的な講義をおこなうことを許され、そのかに、マドリッドから研修に来たサン・デル・リオ (Julian Sanz del Rio, 1814-1869) との交流をつうじて、クラウゼの思想がスペインで受容されることに貢献した。しかし、サン・デル・リオによるクラウゼの『人類の原像』のスペイン語訳が出たのは一八六〇年であり、それよりはるか前の四一年に、アーレンスの主著初版が Navarro によりスペイン語に翻訳されており（二巻本）、その二年後にサン・デル・リオはまずアーレンスを訪問し、アーレンスがかれをレオンハルディに紹介したのだった。レオンハルディは、フランクフルト国民議会で、ヘッカー＝シュトゥルヴェーの革命主義に反対してクラウゼの改革路線をとり、四九年以降はプラハの教授として、クラウゼ＝フレーベル的な全人教育の運動に傾注した。
- (13) J. Beecher, *Charles Fourier. The visionary and his world*, Univ. of California Press, 1986, pp. 413-430. 福島知己訳『シャルル・フーリエ伝——幻視者とその世界——』作品社、二〇〇一年、三五一—三六七ページ。
- (14) H. Ahrens, *Cours de droit naturel ou de philosophie du droit, fait d'après l'état actuel de cette science en Allemagne*, Seconde édition revue et considérablement augmentée, Bruxelles, 1844, pp. 257-258 note. Vgl. Ders., *Das Naturrecht oder die Rechtsphilosophie nach dem gegenwärtigen Zustande dieser Wissenschaft in Deutschland*, Nach der zweiten Ausgabe deutsch



- von A. Wirk, Braunschweig 1846, S. 216f. Anm. (なお、傍点部分は、フランス語版ではイタリックである。)
- (15) H. Ahrens, *Cours de droit naturel*, p. 261. Vgl. Ders., *Das Naturrecht*, a.a.O., S. 219.
- (16) 戦後の早い段階ですでにこのように明快な位置づけを与えているのは、水田洋・水田珠枝『社会主義思想史』、東洋経済新報社、一九五八年、一八七—一八九ページ、である。「サン・シモン派」の動向を展望するうえで有益なものとして、中村秀一「サン・シモン教と普遍的アソシアシオン——サン・シモン派」、『社会思想史の窓』刊行会編『アソシアシオンの想像力——初期社会主義思想への新視角——』、平凡社、一九八九年、所収、を見よ。
- (17) P. Rosanvallon, «Guizot», F. Furet et M. Ozouf et collaborateurs, *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Paris, Flammarion, 1988, pp. 967-972. 河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳『フランス革命事典』(7 歴史家)、みずす書房、二〇〇〇年、一三二—一四ページ。(傍点部分は、原文がイタリックである。)
- (18) 安藤隆穂『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史——』、名古屋大学出版会、二〇〇七年、第八章、を見よ。
- (19) フランス革命が「公教育」を不可欠のものとした点については、つぎを見よ。B. Baczko, «Instruction publique», F. Furet, M. Ozouf et collaborateurs, *Dictionnaire critique de la Révolution française, Institutions et créations*, Paris, (Champs, 265), 1992, pp. 275-297. 前掲『フランス革命事典』(4 制度)、一九九九年、一九四—二一六ページ。また、初等教育(民衆の「訓育」と「保護」)によるブルジョワ社会秩序の形成をめぐる、「ギゾー法」から共和主義的「カルノー法案」をへて国家統制的「ファルー法」(一八五〇年)に至るまでの振幅について、上村祥二「二月革命と初等教育」、坂上孝編『1848 国家装置と民衆』、ミネルヴァ書房、一九八五年、所収、を見よ。
- (20) 公教育大臣ギゾーが連署したルイ・フィリップのオールドナンス(一八三三年十月二十八日)によって設立されたこの新アカデミーは、「フランス王立学士院」の中の一部門として位置づけられ、「哲学」、「道徳学」、「立法、公法および法解釈」、「政治経済学および統計学」、「一般史および哲学史」の五分野で構成された。Vgl. Heinrich Heine, *Historisch-San-Simonismus* 主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール(上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

kritische Gesamtausgabe der Werke, In Verbindung mit dem Heinrich-Heine-Institut, hrsg. von M. Windfuhr im Auftrag der Landeshauptstadt Düsseldorf, Hamburg, Hoffmann und Campe, [Abk.: DHA (Düsseldorfer Heine-Ausgabe)], Bd. 13/2, bearb. von V. Hansen, 1989, S. 1651.

- (21) その成果であるルイ・ルネ・ヴィレルメの報告『綿・毛・絹織物工場の労働者の生理的ならびに精神的状態』（一八三八年、公刊は全二巻で四〇年）については、河野健二編『資料フランス初期社会主義——二月革命とその思想——』、平凡社、一九七九年、所収の部分訳も参照。

- (22) L. Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris, pendant la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Hachette, 1984, pp. 593-604. 一九五八年版の邦訳として、喜安朗・他訳『労働階級と危険な階級』、みすず書房、一九九三年、三四〇—三四六ページ。

- (23) R. Castel, *Les métamorphoses de la question sociale, Une chronique du salariat*, Paris, 1995, p. 348. 前川真行訳『社会問題の変容——賃金労働の年代記——』、ナカニシヤ出版、二〇一二年、一三三—一三六ページ。

- (24) 谷川稔「文化革命としてのフランス革命」、服部春彦・谷川稔編『フランス近代史——ブルボン王朝から第五共和政へ——』、ミネルヴァ書房、一九九三年、所収（第二章Ⅳ）。

- (25) R. Castel, op. cit., pp. 381-383. 前掲訳、二五六—二五七ページ。ルイ・フィリップとギゾーが体现した七月王政における大ブルジョワジーの覇権（政治的・社会的・経済的な支配力）の形成経緯と支配構造の詳細については、J. Lhomme, *La grande bourgeoisie au pouvoir (1830-1880), Essai sur l'Histoire sociale de la France*, Paris, Presses Universitaires de France, 1960. 木崎喜代治訳『権力の座について大ブルジョアジー——19世紀フランス社会史試論——』、岩波書店、一九七一年、の第I部を見よ。その総合的な展望のもとで、ジャン・ロムはつぎのように述べる。従来の「土地貴族『aristocratie foncière』」の勢力に代わって登場した「大ブルジョアジーは、一八三〇年にすでに」一つの「野心」

をもっており、「新しい階層秩序の基準を見抜いてしまっていた」。すなわち、いまや「貨幣や富を持つ階級は、自動的に指導階級となるであろう。〔……〕新しい手段のおかげで遂行しうる際限なき支配の夢が実現しようとしている。サン・シモン主義者たちは、このような展望をだれよりもうまく表現するすべを知っていたのである。」(Ibid., p. 49, 前掲訳、六四—六五ページ)

(26) M. Kliver, op. cit., S. 28.

(27) 本書は(これと相前後して執筆された『ロマン派』とともに)、スタール夫人の『ドイツ論 De l'Allemagne』(一八一三年、ロンドン(フランス語)、翌年、パリ・ライプツィヒ・ベルリン)への対抗を意図して書かれたものとして知られている。当初は三四年に「ルター以後のドイツ」と題してフランス語で雑誌『両世界評論 Revue des deux Mondes』の三回(三月一日、十一月十五日、十二月十五日)に分けて掲載され、それらは、翌年四月に『ドイツ論 De l'Allemagne』(フランス語の Renduel 版、二巻本)に収められるとともに、ドイツ語版としては同年一月公刊の『サロン第二巻』に、当局により削除・改ざんされた形で所収されて、ハンブルクの出版者カンペへのハイネの抗議(『アウクスブルク一般新聞』)と、それに対するカンペの弁明(自社の機関紙)を生んだ。Vgl. DHA, Bd. 8/2, bearb. von M. Windfuhr, 1981, S. 509ff. スタール夫人(ジェルメーン・スタール)と『ドイツ論』については、安藤、前掲書、第六章、を見よ。

(28) DHA, Bd. 2, bearb. von E. Genton, 1983, S. 507. Vgl. Bd. 8/2, bearb. von M. Windfuhr, S. 540.

(29) DHA, Bd. 8/2, Windfuhr, S. 540. Vgl. Bd. 14/2, Hansen, S. 1063.

(30) Heinrich Heine, *Sämtliche Schriften*, hrsg. von K. Brügge, Bd. 3, 3., durchgesehene Auflage, hrsg. von K. Pömbacher, München 1996, S. 913. ムントは、進歩的思想のゆえに学問への道をプロイセン政府に阻まれてジャーナリストとなり、三〇年代には「青年ドイツ派」の一人としてさまざまな文芸誌の編集者をつとめたが、四二年にシェリングの援サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール(上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

助によりベルリン大学で私講師の職をえた。歴史小説や時評を書き、文学史や美学を論じたが、三月革命の時にはコレラのベルリンを逃れてブレスラウへ避難した経歴をもつ。Vgl. Literatur Lexikon, Autoren und Werke deutscher Sprache, hrsg. von W. Killy, Bd. 8, 1990, S. 296f.; Deutsche Biographische Enzyklopädie, 2., überarb. u. erw. Ausgabe, hrsg. von R. Viehhaus, Bd. 7, 2007, S. 311f.

(31) 上の点については DHA, Bd. 8/2, Windfuhr, S. 563f. を見よ。

(32) Ibid., S. 540f.

(33) H. Heine, Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, DHA, Bd. 8/1, bearb. von M. Windfuhr, S. 55f. 伊東勉訳『ドイツ古典哲学の本質』、岩波文庫、改訳版、一九七三年、一一〇——一一一ページ。（傍点部分は原文がイタリックである。）Deismus は通常「理神論」と訳され、そこに啓蒙的・理性主義的性質を読み取ることが多いが、すぐあとでみるようにハイネのばあいには近代理性主義的神観に限定されないから、ここでは伊東勉訳に従い、「超越神論」の語をあてる。伝統的なゲルマンの民間信仰とキリスト教との出会いとあつれき、後者による前者の制圧・排除と前者の潜行化という、十一・二世紀以降に進行した宗教変動とそれがもたらした民衆の生活意識の変化とをめぐる社会的意味については、阿部謹也氏の緻密で膨大な、しかも同時に『自分のなかに歴史をよむ』（筑摩書房、一九八八年）のような根源的なものを平易に説いたものもふくむ、一連の研究結果が想起されるであらう。

(34) Ibid., S. 57ff. 前掲訳、一一四——一六、一一九ページ。

(35) Ibid., S. 60. 前掲訳、一一〇ページ。

(36) Ibid., S. 61. 前掲訳、一一一ページ。

(37) Ibid., S. 61. 前掲訳、一一二——一一三ページ。

(38) Ibid., S. 76ff. 前掲訳、一五六——一五九ページ。

- (39) Ibid., S. 86, 88f. 前掲訳、一七五—一七六、一八一—一八二ページ。
- (40) Ibid., S. 91, 103. 前掲訳、一八五、二二二ページ。
- (41) Ibid., S. 111, 113, 115. 前掲訳、一二八、一三〇、一三五ページ。
- (42) Ibid., S. 113, 115. 前掲訳、一二三、一二四—一二五ページ。
- (43) DHA, Bd. 8/1, S. 495; H. Heine, *Samtliche Schriften*, hrsg. von K. Briegleb, op. cit., Bd. 3, S. 913.
- (44) 井上正蔵「解説」、同編『世界文学大系 78 ハイネ』、筑摩書房、一九六四年、所収、四四六—四四七ページ。
- (45) DHA, Bd. 8/2, S. 530.
- (46) Ibid., S. 531f.
- (47) Ibid., S. 1500f. アンファンタンの思想と実践活動については、見市雅俊「サン・シモン主義の社会観と実践——正統的サン・シモン主義者アンファンタン——」、「思想」、第六二〇号、一九七六年二月、同「女性メシアとスエズ運河——サン・シモン主義者のエジプト伝道について——」、「人文学報」（京都大学人文科学研究所）、第四七号、一九七九年三月、所収、を参照のこと。
- (48) Ibid., S. 554f.
- (49) Ibid., S. 555f.
- (50) Ibid., S. 1502.
- (51) Ibid., S. 1504; DHA, Bd. 14/1, bearb. von V. Hansen, 1990, S. 15f.
- (52) DHA, Bd. 8/1, S. 116. 前掲訳、一二三六—一二三七ページ。
- (53) H. Heine, *Die romantische Schule*, DHA, Bd. 8/1, S. 190. 久山秀貞訳「ロマン派」、木庭宏編『ハイネ散文作品集 第四卷 文学・宗教・哲学論』、松籟社、一九九四年、二四三ページ。

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

- (54) *Ibid.*, S. 245-249. 前掲訳「三〇二—三〇七ページ。ヘーゲルの側についていえば、一八四四年公刊の『ヘーゲル伝』で知られるローゼンクランツは、一八二四年のプロイセン当局によるクーザンの長期勾留にさいして、ヘーゲルが内務警察大臣宛に送った、釈放を懇請する手紙を紹介している。そのうえで、しかし、そのごクーザンは、パリからヘーゲルに種々助言を乞う手紙を書いているが、結局クーザンの関心は「名声」にあり、「ヘーゲル〔の哲学〕を理解していなかった」と婉曲にだがはつきり突き放している。K. Rosenkranz, Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben, Unveränd. reprograph. Nachdruck der Ausgabe Berlin 1844 unter Hinzufügung einer Nachbemerkung von O. Pöggeler zum Nachdruck 1977, Darmstadt 1977, S. 368-373. 中林肇訳『ヘーゲル伝』、みすず書房、一九八三年、三二六—三二〇ページ。
- (55) H. Heine, Lutezia, Berichte über Politik, Kunst und Volksleben, Erster Theil, DHA, Bd. 13/1, bearb. von V. Hansen, 1988, S. 136f. この開会演説で、クーザンは「道徳・政治科学アカデミー」を、プラトンとアリストテレスにはじまりデカルトとライブニッツをへてフランス革命にいたる「理性の光」の系譜上に位置づけ、七月革命を、一七八九年の革命を法的に再確認した「第二革命」と呼んだ。DHA, Bd. 13/2, bearb. von V. Hansen, 1989, S. 1658.
- (56) DHA, Bd. 13/1, S. 137.
- (57) H. Heine, Lutezia, Berichte über Politik, Kunst und Volksleben, Zweiter Theil, DHA, Bd. 14/1, bearb. von V. Hansen, 1990, S. 100-102. 土井義信訳「ルテツィア」、前掲『世界文学大系 78 ハイネ』、三四〇—三四一ページ。
- (58) *Ibid.*, S. 103. 前掲訳、三四一—三四二ページ。
- (59) *Ibid.*, S. 103f. 前掲訳、三四二ページ。（傍点部分は、原文イタリックである。）クーザンの「折衷主義的スピリチュアリズム」は、ピエル・ラロミギエールとメーヌ・ド・ビランの影響下に成立するが、上述のようにクーザンは、もう一人の師ロワイエ・コラルがフランスに導入したトマス・リードをはじめ、スコットランド哲学からも学んで

いた。

- (60) E. M. Ureña, op. cit., S. 544.
- (61) H. Heine, Die Harzreise, DHA, Bd. 6, bearb. von J. Hermand, 1973, S. 84f., 135. 舟木重信訳「ハルツ紀行」、前掲『世界文学大系 78 ハイネ』、一四二—一四三、一七五ページ。
- (62) DHA, Bd. 14/2, bearb. von V. Hansen, S. 1063; E. M. Ureña, op. cit., S. 553f.
- (63) H. Heine, Lutezia, op. cit., S. 105-108. 前掲訳『三四二—三四四ページ』。
- (64) H. Heine, Préface, DHA, Bd. 13/1, S. 166-168. 土井義信訳, 322-323. (傍点部分は、原文イタリックである。)
- (65) それは、たとえばデュルケームがつぎのように描き出した特質である。「それゆえ、かれ〔サン・シモン〕の体系は、かれの時代の精神像を、いわば要約して示しているのであり、このとき練り上げられつつあったのは十九世紀の精神そのものであったから、同時に、あるいは相ついでわれわれの時代に席を占めたすべての偉大な知的運動の萌芽がそこに見いだされたからといって驚くには当たらない。すなわち歴史的方法、実証哲学、社会主義理論、そして最後に宗教的革新への熱望がこれである。だがその密接な近親関係にもかかわらず、これらさまざまな流れが同一の思想、同一の著作の中に共存しえたのは、それらがはつきり姿を現さないでいるかぎりでのみだったのである。たしかに〔……〕同一の全体的状態から出発しているために、それらは同一の社会意識の異なつた諸局面でしかありえない。だが、そのおのおのがそれ自体としてきわめて複雑であつたから、それらは分裂することによつてのみ発展することができた。』野地洋行「あとがき」、バザール他著・野地洋行訳『サン・シモン主義宣言——『サン・シモンの学説・解義』第一年度、1828-1829——』、木鐸社、一九八二年、三一八ページ。
- (66) M. Werner, Heine und die französischen Frühsozialisten, in: Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur, 7. Bd., 1982, S. 88-108, hier S. 89f.

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール (上)

サン・シモン主義をめぐるハイネ、アーレンス、モール（上）

- (67) H. Heine, *Lutezia, Erster Theil*, DHA, Bd. 13/1, S. 98. 『全集』の考証は、この両者の出会いは三六年初め、または三五年末と推定しているが、その一方で、『*Le Monde*』は三六年十一月十六日から三七年十一月一日まで存在した」とも記している。DHA, Bd. 13/2, S. 1284.

- (68) M. Werner, op. cit., S. 92.

- (69) DHA, Bd. 13/1, S. 812.

- (70) DHA, Bd. 13/1, S. 310.

- (71) DHA, Bd. 13/1, S. 97ff.

- (72) *Ibid.*, S. 99.

- (73) 「リュクルゴス」の出所はプルタルコス『対比列伝』、「リリパット」はスウィフトの『ガリヴァー旅行記』である。

- (74) L. Stein, *Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs, Ein Beitrag zur Zeitgeschichte*, Leipzig 1842. 石

川三義・石塚正英・柴田隆行訳『平等原理と社会主義——今日のフランスにおける社会主義と共産主義——』、法政大学出版局、一九九〇年。

- (75) 柴田隆行『シュタインの社会と国家——ローレンツ・フォン・シュタインの思想形成過程——』、御茶ノ水書房、二〇〇六年、九三ページ。

（付記） 本稿は平成二七年度成城大学特別研究助成（研究課題「自然法論と社会政策——ドイツ国家学の基層——」）の交付による研究成果の一部である。

（二〇一七年一月三一日脱稿）